万象　平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和八年十月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十五巻　第七号（通巻二九五号）

創刊二十五周年記念

万象

BANSYO

十月号

2026.10



十月の句

パリよりも空美しと秋遍路

福島せいぎ

「なると」福島せいぎ主宰の句集『火球』中の一句。「秋遍路」とは、四国八十八ヵ所霊場巡りの一つで、特に秋の晴天が続く頃に行なわれるものを指すのです。

最近はお大師さま・空海に対する人々の信仰心の高まりとともに、日本全国、さらには外国からの遍路も増えています。

掲句はヨーロッパから来た遍路が、世界一美しいと言われているパリの空よりも四国路の空が美しいと言ったのを聞いてのものです。遍路により心が洗われ清々しい気持ちになったのです。秋の澄んだ空気の中の遍路には春とは違った感慨をもよおします。

（平岡　巧）

万象

BANSYO

令和八年
十月号

いつも喜んでいなさい。
絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。

テサロニケの信徒への手紙1　第5章16～18節

万象

令和8年10月号

主宰挨拶……江見悦子 5
主宰作品　月涼し……江見悦子 6
名誉顧問作品　土用波……小林愛子 8

「万象」創刊25周年祝句

……元「きたごち」主宰……柏原眠雨 10
……「伊吹嶺」主宰……河原地英武 11
……「雉」主宰……田島和生 12
……「梅檀」主宰……辻恵美子 13
……元「風港」主宰……中川雅雪 14
……「春耕」主宰……蟇目良雨 15
……「鴻」名誉主宰……増成栗人 16

風音集特別作品

寒さかな……中村千久 17
八月十五日……福島せいぎ 18
遠富士……柳澤宗正 19
杉戸の兎……中條睦子 20
北海道の四季……松原智津子 21
簡単服……亀田やす子 22
あをによし……沢辺たけし 23

山桜……吉中　愛子　24
烏瓜……榎本　文代　25
富士の風……神田美穂子　26
千の風……井村　和子　27
昼寝村……前田貴美子　28
第二十四回万象俳句賞発表……29
万象俳句賞　受賞作品　空を大きく……成瀬真紀子　30
次点　水の里……辺野喜宝来　32
佳作　浜木綿……中鉢　弘一　33
佳作　日溜り……藤原千代子　34
選評・得点表……35
応募作品抄（江見悦子選）……42
私のこの一句……加山ひさ子・久留島規子・村上　和義　43
同人作品　江見悦子選……44
同人作品の佳句……江見悦子選　64
同人会だより　オンライン同人句会……小池　清晴　65
8月の「万象」オンライン同人句会高点句

佳句佳句しかじか　同人作品鑑賞（八月号）……神田美穂子　66
同人特別作品
秋茜……道場啓子　68
高千穂夜神楽……中山宣　69
特別作品評（八月号）……荻野加壽子　70
俳句カレンダー掲載句自註　海光を砕く芭蕉の破れやう（十月）……前田貴美子　71
珈琲ぶれいく77……編集部　72
続・風のしをり34　沢木欣一の指標と信念（四）　中山純子……橋本清　73
万葉の抒情38　『万葉集』にたずねる抒情の源流38……大駒泰子・海野俊彦・中谷由郁　74
万象ノオト「エアコン」……松井宣夫・山口孝治・宮本うらら
巻頭作家（九月号）プロフィール　宜野顕（宜野湾）……前田貴美子　76
万象作品　江見悦子選……77
薄荷飴日月譚　ウルルントウハレフウリョク3天高し……中村千久　86
北から南から　北国の初夏（北海道）……林陽子　87
万象作品の佳句……江見悦子　88
ルビーの小函（十月号）……編集部・校正担当　90
万象年譜……大木茂　91
東西南北……116

〈表紙イラスト〉永井もりいち

「万象」創刊二十五周年を迎えて

江見悦子

「万象」はこの春、創刊二十五周年を迎えました。

平成13年11月「風」主宰の沢木欣一先生が亡くなり、翌14年3月に「風」が終刊しました。同年4月、志を同じくする仲間との連帯のもとに、「風」の師系を継ぐ結社「万象俳句会」が誕生し、同人・会員の作品発表の場を確保したいと、結社誌「万象」が創刊されました。

初代主宰は滝沢伊代次、あと大坪景章、内海良太、江見悦子と引継ぎ、「俳句における文芸性の確立」の理念を基本に据え、「俳句実作の態度・方法としての即物具象の写生」を継承して参りました。

この間、「万象俳句会」の運営に携わり支えて下さった大勢のスタッフ、またご理解ご協力を頂きました全国の同人・会員の皆様に深く感謝申し上げます。また何かとご指導ご厚誼を賜りました僚誌をはじめ、俳壇関係の方々に厚く御礼申し上げます。

10年前、創刊十五周年を迎えた「万象」の記念特集として「わたしの一句 『万象』全同人アンケート」を行いました。大坪景章主宰（当時）はじめ158名の同人が、「私の一句」と共に「抱負、『万象』への希望、提言」を記しています。「継続は力」「俳諧自由」「俳句は詩」「心の拠り所」「自分自身を語るもの」等、真摯に俳句に向きあっている中に、「句会という人の交わり」に触れたものが印象に残りました。また高齢化の問題が、自身の課題・「万象」の課題として多数挙げられていました。

それから10年が経過し、益々の高齢化が「万象」を支える人材の不足とも重なり「万象」の存続にも影響を及ぼしかねない事態となっています。同様の悩みを持つ結社も多く、また俳句界ばかりの問題でもありません。私は第四代主宰として、俳句が大好き、句会が楽しいという皆さんの声を大切に、一緒に、無理をせず、出来る範囲での「万象」誌刊行を息長く続けたいと考えています。



月涼し

江見悦子（主宰）

夏至の日の辛味の強きおろしそば

羅の肩美しく日本橋

ぼうたんの香りふくらむ夜の闇

夏つばめ茶屋街の軒ジグザグに

ゆるやかに絵団扇の風立たせけり

眠る子の握りこぶしや遠花火

上り来し片蔭多き団子坂

鰻の日焼き一生と老店主

靖国の地に木斛の花こぼれ

遠雷や池面を打てる軒しづく

流し場をげじげじ右往左往かな

冷房に寝落つ深海魚のごとく

添削のペンの軽さよ月涼し

少年の明るき瞳草の花

草雑いで草にからめり藪からし



土用波

小林愛子（名誉顧問）

鰆東風水平線へ鵜のまなこ

紅梅や壜振つて出すアーモンド

飛ぶ虫の影の濃かりし西行忌

踏青やサナトリウムの跡を抜け

クレソンに小花あふるる誕生日

箱を出る針と絹糸みどりの夜

かなぶんの翡翠のごとき骸かな

初蟬の高きに鳴けり骨納め

とれさうな首の疣なり原爆忌

石鯛の縞あきらかに佐渡泊り　回想二句

夕凪や五右衛門風呂の通し土間

蜂蜜の濁りはじめる盆の家

火の帯の渚へつづく浜施餓鬼

流燈や声明のこゑ風さらふ

漁火のまた浮かびくる土用波

夏雲やワンバウンドの始球式

理髪屋の鏡と話し天花粉

柏原眠雨
（元「きたごち」主宰）

万象のきらめきに跳ね紅葉鮒

燈火親し僚誌のページ捲るたび

河原地　英武
（「伊吹嶺」主宰）

秋晴や万象詠める心ざし

あをぞらの青に徹して秋澄めり

田島和生
（「雉」主宰）

辻　恵美子
（「栴檀」主宰）

青空やアララギの実の燃えてをり

アララギの実や古き語のよみがへり

万象へ銀漢太くまたたきぬ

万象の四半世紀を祝ぐ紅葉

中川雅雪
（元「風港」主宰）

蟇目良雨
（「春耕」主宰）

とり入れの顔に喜色や里の秋

万象の一つひとつの光る秋

増成栗人

（「鴻」名誉主宰）

いま舟が出る鮮やかな虹を背に

葭簀捲き上げて富士仰ぎけり



寒さかな

中村千久
（編集人）

きさらぎのさらさら落つる砂時計

又兵衛と呼ばれて桜ふぶきたる

クリムトの金彩を見て青葉見て

産院の屋根の高さを鯉のぼり

夏旺ん女に美しきアキレス腱

腕抜きてよりマネキンの更衣

吊りやれば風鈴は音ほどきけり

ほがらかに雲かがよふも良夜なる

さ迷へる迷路クリスティーの夜長

鍵穴の奥の暗がり地虫鳴く

霧を来て霧へ消えゆくハイヒール

悼　内海良太さん

をんどりの声の絶えたる寒さかな



八月十五日

福島せいぎ
（顧問）

みどり子のおならめでたし初笑
落雷に腰を浮かせし観世音
吉野川ひとすぢ濁し蜆掻く
天花粉打ちて導師の席にあり
たましひの遊ぶ八月十五日
泥喰うて恋のはじまるむつごらう
太陽の宙にとどまる春の雪
まんばう来る岬の春を見にゆかな
夏服の少女乗り込む島渡船
竹夫人抱けばささくれをりしかな
秋遍路杖新しく発ちにけり
ペタコ鳴くかつて湾生住みし家



遠富士

柳澤宗正
（顧問）

富士見ゆる居間や二人の七日粥
映るものみな影崩し水温む
改札を出れば古里山笑ふ
十人を育てし妣や針供養
海に出て揉まるるばかり花筏
草茂る少年の日の峠道
声明に頭をもたげ青蜥蜴
白萩のこぼれて月の庭となり
ちちろ鳴く永久の別れの朝かな
遠富士や伸び縮みして鳥渡る
父の背へ母のかけやる負真綿
ともがきの語らひ熱き火鉢かな



杉戸の兎

中條睦子
（同人会会長）

水辺より大地目覚むる梅一輪
ミモザ咲き見慣れたる町鮮しく
若葉冷膝抱いて切る足の爪
干梅に星空のつゆ降りきたり
夏萩の前すりぬけてゆく喪服
月夜なり杉戸の兎とんで出よ
花野出て花野に着きぬ手漕ぎ舟
夫の物一枚羽織り我が夜長
黄落の奥なる地獄極楽図
間引き菜の水笑はせて土落とす
待つことの安けし鳰を見てをれば
エンドロール襟巻ゆるく巻きなほし



北海道の四季

松原智津子
（北海道）

流氷の去りたる朝海の紺
大野焼炎は海へなだれけり
散る花の行方は闇の日本海
万緑と分かちてダムの水下る
隣とて丘ひとつ先麦の秋
漁火や白玫瑰の暮れ残る
薄薄とサハリン見ゆる花野かな
牧草に潮の香残る野分明け
秋風や一木一草無き火口
牛飼の家の灯ひとつ雪野原
海峡の奥シベリアの冬銀河
ユーカラを聞く白樺の樹を足し



簡　単　服

亀田やす子
（栃木）

河骨のすつくと立てる流れかな
ざりがにのバケツ提げ来る女の子
鱒釣つて焼けるを待つて夏休み
緑蔭の小径小石を踏みしめて
梔子の花を離れぬしじみ蝶
関節の痛し簡単服を着る
ほととぎす続けて啼けり経を読む
目印はワインの樽と吊忍
英語塾の窓に灯のつく星祭
植木屋の冷し西瓜をよろこべり
木斛の切り口赤し雲の峰
冷し麦茶前にラジオの深夜便



あをによし

沢辺たけし
（千葉）

芽吹き山古都を囲みて安らけし
阿修羅像寄する眉根に春動く
一瞬に鹿の呑み込む落椿
不動明王煤にまみれて余寒なほ
蟻出でて土塀の角を曲がりけり
鑑真像の朱の襟元へとどく東風
若芝に坐す鹿の眼のやはらかし
フラッシュは止めよ修二会の深き闇
お松明杉の全容あらはるる
修二会をへ糠星もどる御空かな
池の端を歩む牝鹿や涅槃西風
梅が香に残る都の匂かな



山　桜

吉中愛子
（東京）

山桜山もろともに前のめり
白光を放てり泰山木一花
追風にみごとなつむじ三鬼の忌
巣の縁を羽習はしの燕の子
くし形の西瓜の上の子の目玉
まくなぎを払へば柱太くなる
大仏の目の中にゐて今朝の秋
この辺り静かに歩め原爆忌
泪夫藍を咲かせて男勝りかな
槇櫨の実日に歌ふかにをどるかに
割干しの大根夜に白きかな
猪肉を喰ひしと朝のことばあふれ



烏瓜

榎本文代
（神奈川）

小流れの音きらきらと梅二月
囀へ盛り上がりたるもぐら土
デパ地下のにぎはひ魚は氷に上り
甘茶寺やんちやな声のあがりたり
螢見に鉄の匂へる町抜けて
ゆがみたる影八月のアスファルト
コルク栓抜く音ひとつ夜の秋
鰡跳ねてオルガン低くひびきたる
踏み込めぬ草の深きに残る虫
烏瓜夕日からめて引き寄する
校庭の掛け声とべり干蒲団
鈍行のがたんと止まる冬夕焼



富士の風

神田美穂子
（静岡）

源流の苔より春のいさらみづ
磯遊び攫われやすき子の帽子
駄菓子屋の奥の暗さや雛まつり
富士の風翼に燕巣立ちけり
頬杖をついて金魚と見つめ合ふ
かなかなや今日の夕餉は何にせむ
秋夕焼土手走り込む弓道部
落葉踏む一歩に楽の生まれけり
靴べらを滑る踵やつづれさせ
律の風織部の皿の深みどり
漱石忌ボンボニエールの金平糖
無住寺に上ぐる賽銭十二月



千の風

井村和子
（石川）

月桂樹の大枝下ろし風木舎
うす紙につつむ哀しび青しぐれ
分かれても亦合ふ道や萩すすき
学士会館に集ふ朋友首都の秋
天の川気宇壮大と口に出て
外つ国へ明日旅立ちの菊枕
ヴェネチアの迷路めく路地小鳥来る
白鳥の飛翔かがやく欣一忌
千の風統べ雪吊の心柱

静岡 富士霊園に純子墓碑 二句

霊園に師のこゑかとも呼子鳥
純子墓碑背に美しき春の富士
座禅草一葦の水のきらめきに



昼寝村

前田貴美子
（沖縄）

猫の子をつまみあぐるに指三本
うりずんや道濡れてゐる島の朝
潟風は午後のかげりを抱卵季
ほほづゑに飽きて目刺を焼くことに
山羊合せ観てきし夜を春の雷
少年は酢つぱし朝の青蜥蜴
今日のことことに涼しき風のこと
六月の磯に真水の湧くところ
昼寝村山羊も小舟も木につなぎ
苦瓜の凸凹へ日がでこぼこに
欣一忌ことりとなくしものの音
煤逃のままに戻らぬ男かな

「万象」創刊二十五周年記念

第二十四回万象俳句賞　発表

万象俳句賞　空を大きく　成瀬真紀子



成瀬真紀子 氏

次点　水の里　辺野喜宝来

佳作　浜木綿　中鉢弘一

佳作　日溜り　藤原千代子

第二十四回万象俳句賞は選考の結果、右のとおり決定しました。

万象俳句会

空を大きく

成瀬真紀子

立春の一万尺の嶺白し

極薄の和紙の練色水温む

小流れにまだ水を出ぬ名草の芽

白鳥引く我の頭上に声落とし

バレンタインデー亡き人へ星のチョコ

三月十一日廻船問屋に半旗上ぐ

雪吊解く芯に絡める百の縄

花の雲白き雲へと続きけり

花万朶小さき鳥の溺れさう

略歴

昭和26年　福井県生まれ
平成19年　「万象」入会
平成21年　「万象」同人
平成21年　「りいの」入会 創刊同人
令和5年　「中山純子記念俳句賞」受賞
令和6年　「りいの」終刊
俳人協会会員
富山県射水市在住

ボーダーは鵯とおそろひ花衣

落花浴びたくて小道を遠回り

散る桜吹き上げらるるとき光り

天を差し永遠に子供や甘茶仏

白い鳥黒い鳥来る田打かな

燕来る光と影をひるがへし

昨日より空を大きくつばめの子

囀りに警戒の声しかとあり

松雀鳥の声池の面を転がり来

風光る連峰と絵図見比ぶる

尾のなびく天馬のやうな春の雲

受賞の言葉

「万象俳句賞」受賞の報を受けた時、夢ではないかと思いました。

万象に入ったら毎年俳句賞に応募するようにと母に言われ毎年挑戦してきました。今年はなかなか選出が叶わず身ほとりの句となりました。その作品を評価してくださった選者の皆様に深く感謝申し上げます。

今年は万象創刊25周年。その記念の年に俳句賞を頂きこの上ない喜びです。まだまだ拙い私ですが、これを励みに俳句を続けていきます。

昨年夫を亡くし本当に辛い一年でした。でも悲しい句は詠まず、空を見上げるような明るい気持ちの句を詠もうと思いました。それがいつも私の俳句を応援してくれた夫に報いることになると思います。

お世話になっている金沢の茜句会・千草句会の皆様に心より御礼申し上げます。

水の里

辺野喜宝来

沖晴や旧正月の舫ひ船
浦人の巌対峙や初御願（はちうがん）
踏み入りて杜の初音の途切れなし
海へ出る路地の日だまり瑠璃はこべ
波音に混じる人声二月かな
初蝶や日向日陰の水匂ふ
種浸す手押しポンプの影踏みて
草萌ゆる野に水音のあふれたり
緋桜の淡き木漏れ日水の里
産井戸（うぶがー）の水音今も蝶まぶし
耕人や畦にラジオと塩むすび
野に遊ぶ紡ぐ言葉の種々よ
蝌蚪生る水は光りを集めたり
しだれ咲く火炎葛や水鏡
春昼の水襞乱す雑魚の黒
永き日や馬穴に雑魚と鳥のこゑ
壺すみれ路地に別るる下校の子
囀の一樹の陰や井戸ひとつ
井戸神を根城の猫や春夕焼
うりずんや一番星の帰り道

浜木綿

中鉢弘一

凍て滝の奥に潜みし水の音
流氷の近づく兆し雪粗し
山眠るよろずの生気抱きつつ
池の面に白鳥映す孤影かな
山峡に残る雪形日に痩せて
揚舟の覆ひ畳みて海明くる
一湾の白き濁りや鰊群来
雪解畑黒土湛ふ地の温み
早春の鴨引く水尾の小さかり
倒れ木も一景にして水芭蕉
蒼天にえぞにうの花無垢なるや
夏旺ん大河のうねり河口へと
浜木綿や潮騒遠く砂嘴の果て
蛇の衣虚ろに透きし眼かな
水草垂るほどの身の嵩糸とんぼ
スケッチの画布にはや秋ひと葉落つ
半月や街のあかりの灯らぬに
空と湖のあはひ織りなす珊瑚草
霊場の観音染むる秋夕焼け
六万余の合祀の杜や紅葉散る

日溜り

藤原千代子

日溜りに鳥の声湧く初参
納屋中の鍬に機械に注連飾
地続きの菜畑に日差し初社
沢音の透き通りけり朴の花
風神めく茶刈袋や三番茶
茶畑の外れ口開く獣罠
馬鈴薯植うなぞえの息を整へて
青鷺の両翼広ぐ大河原
鮎釣の等間隔の背中かな
しやがみ込み囮の鮎を付け替ふる
本流を引き一村の代田掻く
夕明かり植田の囲む五六軒
時をつくるを忘れてしまふ羽抜鶏
野菜屑還りし畑やトマト熟れ
稲刈りの畔に降ろせりランドセル
大根蒔く畝のぬくみに三粒づつ
川渡る尾の波形や石叩
秋夕焼砦山にて燃え尽くる
半分は鶏小屋に冬菜籠
冬蝗日溜りに跳ね草の色

選評

江見悦子

今回は36名から応募があった。内訳は同人23名、会員13名。昨年の同人応募が15名だったことを思うと「中山純子記念俳句賞」が終了したことが同人数の増加につながったのだろう。

昨年の選評で、今後は同人にとっては「万象俳句賞」が年に一度の腕試しになると書いた。8名増えたことを喜んでいる。また、北海道から3名、沖縄から3名の応募があった。「万象」が全国区であることを確認出来て大変嬉しい。

万象賞は、同人、会員の別なく応募できる結社賞である。また過去に万象賞に輝いた方も、何度でも応募できるコンクールでもある。年に一度、作品20句をまとめ選を受けることを、自身を計る良い機会ととらえ今後もチャレンジして欲しい。

成瀬真紀子さん（射水）受賞おめでとうございます。努力と修練に敬意を表します。

1位「水の里」辺野喜宝来さん（沖縄）。沖縄の春を、水の音、水の匂い、水の光で表現し、暮しに欠かせない井戸を配して編んだ20句。感性豊かで柔らかな表現がこの作者の個性。言葉への興味を持ち続け、自分の句を詠んで下さい。

種浸す手押しポンプの影踏みて
野に遊ぶ紡ぐ言葉の種々よ

2位「日溜り」藤原千代子さん（静岡）。「初参」から「冬蝗」までの一年間を、畑作、茶摘み、鮎釣、稲刈り等の実際の作業を通して時々の発見を詠んだ句群。安定感があり映像として見えて来るのはきっちりした写生の力によるもの。

野菜屑還りし畑やトマト熟れ
半分は鶏小屋に冬菜籠

3位「梅雨」村田由美子さん（千葉）。地味ではあるが、日常の明け暮れを20句に仕立てた。素直でてらいのない句。

男物ばかり干されて濃紫陽花

宮崎の中山宣さんの「東京大空襲の記憶」に注目した。戦争の実体験を語り継がねば、という強い意志を感じた。

毎年のことですが、誤字、送り仮名、文法上の間違いがかなり見られました。まとまったら、辞書、歳時記での確認が欠かせません。それが推敲の一歩です。またついうっかりなのでしょうが二重投句がありました。作品が良かっただけに残念でした。未発表新作が鉄則です。

厳しいことを書きました。俳句が好きという気持を大切に、仲間と切磋琢磨して俳句を楽しんでいきましょう。

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	10	12	12	14	14	14	17
作品名	空を大きく	水の里	浜木綿	日溜り	六月の翳り	素顔	白鳥引く	夕映えて	草木萌え動く	百名山に挑戦す	梅雨	故郷の思い出	雲の峰	三線の音	カンカン帽	子規を追ふ	額の花
作者名／選者名	成瀬真紀子	辺野喜宝来	中鉢弘一	藤原千代子	宜野灣顕	谷渡末枝	芝宮留美子	南恵子	一由久美子	川口和代	村田由美子	恒川清爾	高嶺容道	永田公春	久保田富士子	長谷川洋子	奥太雅
江見悦子		10	6	9		5	3		4		8	7		2			
小林愛子	10					9	5	3		1			7		8		
中村千久	1		8			4			9				3	5	6		
福島せいぎ		1	7	3	5	9	10			8	4					6	
柳澤宗正				8			2	7		5	9	9	3				4
中條睦子	8	10	3	5	1			9		2				7			
前田貴美子	4	10	8	6	9	2			3				7				
榎本文代	10	9		6	4	1	7		5			2					8
神田美穂子	10	8	9	6	7	5					4						
沢辺たけし	9		5				4	6	1	10		2				8	
合計得点	52	48	46	43	36	35	31	25	22	21	21	20	20	14	14	14	12

36編の応募に敬意

小林愛子

1位「空を大きく」成瀬真紀子さん

小流れにまだ水を出ぬ名草の芽
天を差し永遠に子供や甘茶仏
昨日より空を大きくつばめの子

作者の大らかな詠みぶりは健在である。一句目、水底に萌え出た名草の芽に希望を託して繊細かつ鋭敏。二句目、「永遠に子供」の大胆な発想に、今までと違った趣が感じられる。三句目、ふわりと包むような表現によって展開されている。

2位「素顔」谷渡末枝さん

旧姓の文の束燃す遠蛙
さはさはと空奪ひ合ふ今年竹
人を待つミラーに映る炎暑かな

どの句も主題と季語との距離の取り方や、句のひろがりかたに並々ならぬものを感じた。全体のレベルを揃えて欲しいと思う。新しいものを見るような目で推敲を繰り返すとよい。

3位「かんかん帽」久保田富士子さん

走りくる水やクレソン花盛り
阿夫利嶺に横雲ながき梅雨入かな
厭はれて丸まるばかり根切虫

身辺を一句一句丁寧に拾い上げ、衒いのない表現である。

					30	30	28	28	25	25	25	24	23	22	21	20	19	18
	大阪万博記念公園	わらべ駆す里	六月の風	春眠	太宰府行	真夏の夢	神楽坂	日本平動物園	眉山	ふるさとへ	人・ひと・人	祈り	軒菖蒲	足まかせ	宿場散策	水辺の景	東京大空襲の記憶	夏の末
白鷺	松浦陵保	山田季聴	大場八朗	廣田宏美	杉本年虹	大内マキ子	名和政代	望月敏男	山本瑤子	岡本敬子	伊東文恵	小川明美	松田好子	松永博子	本多ひとみ	小池清晴	中山宣	丸本祥夫
杉田富美代												1						
											2	4						6
									2						7			
									2									
						1										6	10	
										4			6					
															1			5
							3											
					1						2					3		
								3						7				
0	0	0	0	0	1	1	3	3	4	4	4	5	6	7	8	9	10	11

無得点は省略

連作を読む楽しさ

中村千久

圧倒的な評価を得た「空を大きく」。真紀子さん、受賞おめでとうございます。改めて読むと、もっと上位に推してもよかったと思いました。選者の力量不足ということかとも。

1位　宜野頭さんの「六月の翳り」。作品中にはないこのタイトルに惹かれて読み進みました。そしてそれが、後半にある沖縄忌から生まれたものであることを知ったのです。沖縄の風土と歴史を詠んだ句群に心を揺さぶられました。

遥拝の霞隠れや神の島
六月や哀しきまでに人の波
蒼海へ洞窟の闇より夏つばめ

2位　一由久美子さんの「草木萌え動く」。新中央句会に登場した気鋭の作者を「イチオシさん」と呼んだりしました。写生句の中に見え隠れする独特の感性が魅力的です。タイトルも作品の大切な部分であることもご一考ください。

早春や耳元で振る土の鈴
木の芽吹く幹に螺旋の蔓の跡
竹皮を脱ぎて日の斑のつやつやと

3位　中鉢弘一さんの「浜木綿」。北の大地の四季折々に目を留めた意欲的な写生句の連作は読み応えがありました。

凍て滝の奥に潜みし水の音
流氷の近づく兆し雪粗し
浜木綿や潮騒遠く砂嘴の果て

感動と平明を

福島せいぎ

1位「白鳥引く」芝宮留美子さん。白鳥にテーマを決めて20句をまとめるには、よほどの時間と努力が要る。順位が決まった後、応募作全てを読み返したが、私にはこの作品がいちばん心に訴えてくるものがあった。

①テーマが一貫している。②平明な表現。③写生の奥にあるもの。が、備わっている作品が多かった。

空低く二羽の白鳥離れざる
小舟めく白鳥の羽根誰を乗す
白鳥のおもひおもひの姿なる

2位「素顔」谷渡末枝さん。日常の身辺をさらりと詠んでいる。人生達観の思いが伝わってきて、うらやましいと思うほどであった。楽しい作品に心がなごむ。

よつたりのひとりが欠ける春炬燵
冷し酒今日の自分を二度褒めて

3位「百名山に挑戦す」川口和代さん。テーマが壮大で良かった。今後に期待したい。

鈴振つて鳥居をくぐる登山口
雲海の波に明けゆく白馬岳

テーマと生活実感

柳澤宗正

36篇の力作揃いの応募作品の選考に当たって、私はテーマの今日性と生活実感を重視した。

1位「東京大空襲の記憶」中山宣。戦後81年、未だに戦火の絶えない世界にあって、忘れてはならない戦争にまつわる記憶である。東京大空襲もその一つ。空襲で焼け出され、田舎への疎開を余儀なくされるまでを丁寧に綴めた。単なる報告句にならぬよう戦争体験を戦争を知らない人たちにどう俳句で伝えていくかは今後も課題。

爆音の弥生の空や街燃ゆる
燃え焦がる向かふ三軒竈晦
思ひ出は父のふところ雲の峰

2位「故郷の思い出」恒川清爾。遠くなった故郷の思い出を綴った作品で共感を呼ぶ。

庭石の臼たりし石額の花
門閉ざす無人の家屋柿あかき
鐘太鼓三河万歳土間狭き

3位「日溜り」藤原千代子。生活実感の滲む佳句揃い。

納屋中の鍬に機械に注連飾
本流を引き一村の代田掻く

力作揃いの作品

中條睦子

力作揃いの作品に順位をつけることに迷いがあった。

1位　沖縄の辺野喜宝来さんの「水の里」。

初蝶や日向日陰の水匂ふ

日向や日蔭からは水の匂いがして来る。そこに折しも初蝶を捉えたところに、大らかな沖縄の自然が描き出されている。〈耕人や畦にラジオと塩むすび〉〈緋桜の淡き木漏れ日水の里〉など気を緩めずに詠まれた作品からは、写生のしっかりした力量が感じられた。

2位　石川県の南恵子さんの「夕映えて」。

腹這ひになりて黒百合覗き込む

お花畑に楚々と咲く黒百合、腹這いになって黒百合を覗き込む作者の無心さに、深い感慨が感じられる。

明日めざす頂き指せば星飛べり

この句のように夏の季語に交じり、秋の季語も散見するが、山上の季節感を思うと納得できる。

3位　万象賞に輝いた成瀬真紀子さんの「空を大きく」。

昨日より空を大きくつばめの子

小流れにまだ水を出ぬ名草の芽

奇を衒うことなく、物を観て言葉を紡ぐ作品からは、淡い詩情が感じられる。

20句の舞台の物語

前田貴美子

1位「水の里」辺野喜宝来さん。正に水音のように「水の里」を流れる淡い句群の物語である。出会いに生まれた言葉たちは、一度体を通して自分のものとするから、動かない。

初蝶や日向日陰の水匂ふ

種浸す手押しポンプの影踏みて

緋桜の淡き木漏れ日水の里

蝌蚪生る水は光りを集めたり

うりずんや一番星の帰り道

2位「六月の翳り」宜野頭さん。螺鈿文箱から詠み継がれてゆく景色は、沖縄忌への思いを静かに立ち上げる。20句を流れるのは、島の湿りであり、「六月の翳り」である。

遥拝の霞隠れや神の島

機音や福木落花の風じめり

病窓に真昼の翳りゼリー揺れ

病棟は黙の回廊沖縄忌

六月や哀しきまでに人の波

3位「浜木綿」中鉢弘一さん。冬から春への遅々とした足音のように、移り変わる北国の四季が詠まれてゆく。地貌季語の確かさ。地についた詠みぶり、特に前半の句がいい。

山峡に残る雪形日に痩せて

揚舟の覆ひ畳みて海明くる

一湾の白き濁りや鰊群来

雪解畑黒土湛ふ地の温み

言葉の吟味

榎本文代

36編の応募作品からは、努力と熱意が感じられ順位をつけることが難しかった。入選如何にかかわらずこれからも挑戦を続けてほしい。

1位「空を大きく」成瀬真紀子さん。平明な句の中に柔らかな感性と言葉の吟味工夫が感じられた。

散る桜吹き上げらるるとき光り
ボーダーは鴨とおそろひ花衣
昨日より空を大きくつばめの子

2位「水の里」辺野喜宝来さん。沖縄の風土を背景に写生の目と豊かな抒情性のある作品。

海へ出る路地の日だまり瑠璃はこべ
蝌蚪生る水は光りを集めたり
永き日や馬穴に雑魚と鳥のこゑ

3位「額の花」奥太雅さん。身辺を詠んで技巧のない率直な表現に好感が持てた。

パン屑に緋鯉真鯉の水しぶき
睡蓮の天水桶に上ぐ蕾
翡翠の一閃池面を掬ひ上ぐ

選外となったが「雲の峰」「夏の末」「カンカン帽」に目が止まった。今後に期待したい。

俳句は世界一短い詩

神田美穂子

今年の応募は36編、繰返し見て○印を多く付けられた作品から8編を選び、○印は少なく未熟ながら、興味を持った作品の多い2編を選びだした。上位3作品はすぐに決まった。

1位「空を大きく」成瀬真紀子さん。20句を通して疵がほとんど見られず安心して読めた。自身の身近な日常を、詩として昇華させている所に作者の柔軟な心が垣間見えた。

小流れにまだ水を出ぬ名草の芽
バレンタインデー亡き人へ星のチョコ

2位「浜木綿」中鉢弘一さん。20句を読み北海道と想像することができたが、地名や固有名詞に頼ってない所に好感が持てた。一読映像が結べる句が多く、見慣れた景色とじっくりと向かい合った作者の作句姿勢を窺うことができた。

凍て滝の奥に潜みし水の音
蛇の衣虚ろに透きし眼かな

3位「水の里」辺野喜宝来さん。初御願、産井戸、と沖縄独特の季語や表現が使われているが、無理無く必要な所に据えられて、ささやかな日常に詩を探り当てている。

初蝶や日向日陰の水匂ふ
うりずんや一番星の帰り道

連作というと吟行句が多く、地名や固有名詞に頼る報告句が散見。俳句は世界一短い詩であることをお忘れなく。

36名の方々に敬意

沢辺たけし

応募作品が多く、難しい選でしたが、作品と向き合っている時間は楽しい時間でもありました。

1位　川口和代さんの「百名山に挑戦す」。幾つも出て来る山の名が作品を彩っているのだが、山の名の力に頼っている感もある。しかしながら、テーマが解り易く、登山の臨場感があり、読み終わった後は爽快感さえ覚えた。

山小屋の灯かそけし夕間暮
赤岳の赤き岩肌岩桔梗
真青なるやまなみ下り大花野

2位　成瀬真紀子さんの「空を大きく」。おそらくお住まいである射水市での身近な景を20句に纏めたと思うが、春を迎えた喜び、楽しさが伝わってくる作品となった。

小流れにまだ水を出ぬ名草の芽
花万朶小さき鳥の溺れさう
尾のなびく天馬のやうな春の雲

3位　長谷川洋子さんの「子規を追ふ」。東京、根岸の子規庵から、子規の故郷である愛媛県へ移動しての力作。近代俳句の礎を作った子規への憧れが作品に表れている。

子規庵の句会の部屋へ春日影
バット持つ子規像見上ぐ日焼け顔
青嵐従軍願ふ文字太し

俳句
巻頭作品50句＝片山由美子
作品21句＝奥坂まや・岸本尚毅
10月号予告
9月25日発売
予価1,350円（本体1,228円）⑩

特集
遊びのすすめ
●俳と遊と戯　●遊びとルール
●韻律と言葉遊び　●俳諧味再考
●連句と題

特別企画
古典題詠ルネッサンス
――令和丙午 六百番歌合 恋五十題競詠――
高橋睦郎×高山れおな×岩田奎
司会：望月とし江

句集特集
山尾玉藻句集『くれぐれと』

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。
発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

「万象俳句賞」応募作品の一句

（江見悦子主宰選）

応募者36名の内、受賞者を除く32名の作品から、各一句を紹介し、ここに敬意を表します。（応募順）

登り坂道しるべなる垂れ梅　廣田宏美
動物園病舎の窓に小鳥来る　望月敏男
子規好みの六月の風今も吹く　大場八朗
秋天や銀輪光る札の辻　松永博子
峰めぐり馳する飛沫や田水引く　山田季聴
鰹木のふつくらとしてあたたかし　一由久美子
ふはふはの成人の日の卵焼　伊東文恵
空低く二羽の白鳥離れざる　芝宮留美子
這松へ隠れてしまふかやくぐり　南　恵子
爆音の弥生の空や街燃ゆる　中山　宣
甲斐駒を登る背へ雷とどろけり　川口和代
木洩れ日の肌に優しき小春かな　松浦陵保
亀に亀また亀の乗り聖五月　小川明美
罅走る地蔵の肩に初蝶来　本多ひとみ
夏暖簾三線の音洩れにけり　永田公春
夕焼より紙飛行機の飛んで来し　久保田富士子
たつぷりの風をはらみて鯉幟　杉田富美代
雨の薔薇見番の路地探しけり　名和政代
誰も居ぬ生家の戸口軒菖蒲　松田好子
月光や香りほのかな団子食み　恒川清爾
山茶花の白を散らせり子規の庭　長谷川洋子
蒸風やけふまつさらのトウシューズ　大内マキ子
がじゆまるの走り根夏草の中へ　髙嶺容道
病窓に真昼の翳りゼリー揺れ　宜野　顕
還らざる兵のふるさと雪ぼたる　岡本敬子
山登る天然の風浴びながら　山本瑤子
どくだみの残り香強き軍手かな　奥　太雅
男物ばかり干されて濃紫陽花　村田由美子
柿の木をぶら下がる蛇首を挙げ　谷渡末枝
手賀沼を滑る白帆や大南風　小池清晴
蛸剝がすティーシャツに墨浴びながら　丸本祥夫
通天閣日焼けの車夫の四頭筋　杉本年虹

※作品は引用部分を含め、すべて原句のまま掲載しました。（編集部）

私のこの一句

末生りの糸瓜ばかりや子規忌過ぎ　加山ひさ子

正岡子規については浅場英彦先生より詳しく学び、それ以降、松山の生家、根岸の子規庵、正岡子規球場、大龍寺にあるお墓にも吟行をしている。昨年の9月に訪れた際、糸瓜棚の葉は青々と茂っているのに、肝心の糸瓜は二つ。しかも末生りであった。係りの方の話では、年々小ぶりになってきているとのこと。子規庵には何度か伺っているが、こんなにも糸瓜の少ないことは初めてであり、淋しく棚を見上げた。

唐がらし赤し佐倉の武家屋敷　久留島規子

3年前の秋、俳人協会千葉県支部の吟行句会が行われ、初めて佐倉市を訪ねた。城下町として栄えた歴史のある佐倉で、最初に向かったのは、江戸時代後期の藩士が暮らした佐倉武家屋敷である。裏庭の畑では野菜を作り、菜の足しにしたとか。慎ましい下級武士の暮しを垣間見た。赤い艶やかな唐辛子を句材に頂いた。選句の間に、地元の画家・浅井忠についての良太先生の講演を聴く。実はこの講演が目的で、佐倉まで出かけたのだった。私の唐辛子の句は最下位に入選し、賞品に五百円のギフトカードをいただいた。

つばめ来る野喜に舟吊る藍屋敷　村上和義

阿波藩は江戸時代から藍の産業がさかんでした。かつての吉野川の氾濫によってその流域は肥沃な土壌に恵まれました。藩の保護により藍の栽培は全国一と呼ばれる程でした。藍商人は富を高めて大きな屋敷に住んでいました。毎年台風や洪水が発生するため、避難用の小舟を軒下に吊るしていました。そのような藍屋敷が今も保存されて、観光客も沢山訪れています。藍の葉が育つころ燕がやって来ます。この田園風景はふる里の宝物と言っても過言ではありません。藍を育てる人、藍を商う人の懸命に働いてきた過去に思いを馳せました。

万象基金のご報告

中鉢　弘一様（札幌）　三口

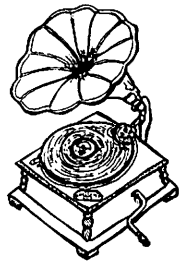
（令和8年8月1日～8月31日・受付）

「万象」の発展のため、大切に使わせて頂きます。

万象俳句会

同人作品

江見悦子選



札幌　岡本敬子

浜茹での蝦蛄の歯応へうしほの香
高原の果ての白山一花かな
えぞにうのぽつねんとして無風流
えぞにう咲く囚人道路守るやう
虎杖の花しろじろと暮れ残り

札幌　林陽子

白杖の人菩提樹の花のもと
取つて置きの九谷が似合ふ白薔薇
吹き降りの参道染むる桜の実
夕さりの白白明き山法師
青き香の茅の輪に心癒さるる

札幌　落合裕子

遠雷や天神山に雲厚く
虎杖の花や右岸は紅の色
川波を隠して木々の茂りかな
青胡桃豊平川の風に肥え
舞ひ上がる青鷺首をくねらせて

札幌　濵谷和代

独り居のひと日の終り暑気払

朝市の売りは朝もぎ胡瓜かな
菩提寺へ石の坂道七変化
渓流のせせらぎ白し九輪草
潮風の抜くる酒蔵大西日

札幌　大内和憲

走り梅雨錠前錆びし取水塔
鈴蘭の花から花へ雨しづく
大喚声梅雨雲高く押し上ぐる
白衣はや固く乾きて夏に入る
旱星真闇のそだつ利尻岳

札幌　紅露恵子

実桜の輝き空は真青なり
丁香（はしどい）樹の並木の香り風涼し
夏館句座は鍛絵の葡萄の間
鴛鴦涼し小島の木蔭草の蔭
通り雨薔薇のアーチに雨宿り

札幌　大内マキ子

河童忌や木と木をつなぐ蜘蛛の糸
貝殻の風鈴青き音放つ
甚平の胡坐に嬰を抱き取り
三尺寝職人の顔幼かり
炎天や切絵のごとき影つれて

札幌　中鉢弘一

漣や祭太鼓の音遠く
浜昼顔捨て浮玉に絡みをり
手のひらの蟬の幼虫雨色に
空蟬や揺るる一葉に蹲ひて
合歓の花ひとつひとつに小糠雨

札幌　北浦詩子

ストローを昇る緑やソーダ水
寝間に差す光一条明易し
正忌日庭より一輪額の花
大西日フロントガラス一撃す
狐雨鳥居の奥の草いきれ

江別　佐藤哲

空箱のでんと積まれし春錬
教会にうぶ声はじけ草萌ゆる
山に向く畦くろぐろと春の風
捨てサイロ大口空けて夏を病む
郭公の一声村を動かせり

江別　太田佳美

喧しきビヤガーデンの無礼講
浴衣の子袂にたんと風孕み
打水や訪ふ人もなき午後なれど
農場のアイスクリームベリー添へ
文字薄れ台座に徴の開墾碑

新潟　高橋ひろ

仏壇の一灯だけの夕端居
茄子嫌ふ兄の忌日の茄子汁
土用蜆男鹿からの水零しけり
釣人の上に拡がり鰯雲
坐つても掛けても一人夕端居
落し文解いてみたき気も少し

新潟　高野松風

越して来し男が会釈溝浚へ
とまりたるバスが触れゐる花石榴
小流れの鯉のあぎとふ額の花
夾竹桃散り敷く磴のうすじめり
バス停を少し離るる夏木蔭

益子　光岡れい子

池に浮く和毛押しやる水馬
牛蛙ひとかき水輪の十重二十重
雨来ると雲見る庭師沙羅の花
豊かなる青田の波や遠筑波
梅雨あがる路面電車の込み合うて

芳賀　大村かし子

朝戸風青田の匂運び来る
関東に朝からの地震梅雨寒し
八重咲きの紅のこぼるる夾竹桃
寄せ植ゑに止まりさうなる夏茜
鬼百合やしだいに暮るる石仏

宇都宮　阿久津勝利

法螺貝の音降りて来る雲の峰
謹呈の句集ずらりと夏館
一条の落ちて飛び散る滝の音
Tシャツのトランプの顔皺だらけ
手作りの句帳に百句生身魂

栃木　上岡佳子

包丁をためらふ茄子の紫紺かな

茅の輪潜る杖に小鈴や九十九髪
こふのとり四羽巣立てり遊水地
水打つて一日の仕舞ひ宵の星
渡良瀬川の大河となるや送り梅雨

佐野　増田幸子

青梅雨や円仁の鐘思ひきり
梅雨の蝶小町の墓に生まれたる
田植済み水満々と小野寺米　※小野寺米……栃木県のブランド米
門川につぎつぎ水輪梅雨さなか
眼科了へ仰ぐ梅雨空青まぶし

佐野　加藤季代

名も知らぬ花も混じりて草いきれ
壺の薔薇くづれて猫の耳ぴくり
牡丹の散りて虚ろの風となり
しろがねの産毛の光る実梅かな
日傘の熱たたみて潜る仁王門

佐野　阿部澄

川合ひに小町の墓や芹の花
錫杖にしづく一すぢ花茗荷
万緑や方三尺の開山堂
水撒くや豹紋蝶のゆらゆらと
翡翠に水陽炎の揺れにけり

佐野　芝宮留美子

池囲む夏草未だ瑞々し
半夏生の白浮き出づる暮色かな
山椒魚小さき手肢を動かしぬ
反り美しき檜皮の社青時雨
風抜くる小町の墓や夕化粧

佐野　島田和枝

夕焼はいつも母待つ記憶かな
涼しさに目覚めし夜半や雨の音
凛として詩を読む少女沖縄忌
夏書終ふ三千院の杉木立
梅雨出水濁流の渦橋を越え

佐野　売野緑

白鼻心に西瓜とられてしまひけり
花手水のポンポンダリア孔雀鳴く
目高の子益子の瓶に育てけり
石灰を焼く煙棚引く茅の輪かな
いつよりかおはぐろ舞へる狭庭かな

佐野　店網洋子

小流れをぴよんと越えたり飛蝗の子
葉をつかむ蟷螂の子の風のまま
束の間の夕日眩しき青田かな
亀泳ぐ万緑映る山の池
野萱草の明るさのなか小町塚

足利　大木茂

細き雨止まぬ茅の輪をくぐりけり
隈笹を叩く雨音半夏生
半鐘吊る火の見櫓の鉄灼けて
観覧車下りよろけたり白日傘
老二人果樹売る店や誘蛾灯

土浦　澤照枝

白蓮開き切つたりカフェの前
久慈川広し次々と鮎釣られたる
焼き上がる子持鮎待つ簗の客
川魚の店に飼はるる目高かな
白鷺の翔ちたる蓮田葬の列

加須　茂木弘子

紹の袖を揺らし僧侶の落語かな
老鶯や固く閉ざせる円仁堂
梅は実に門重き杏壇門
鰺捌く店の暖簾を撥ね上げて
夏落葉とどまる宮の土俵際

さいたま　山本右近

親を呑むほどに口あけ燕の子
空き缶の立つて流るる梅雨夕焼
蓮の葉の影に蓮の実蓮の花
大輪の朝顔市の圖十郎
夏落葉踏むその道をゆづり合ひ

所沢　三好かほる

カフェの軒身をのり出して燕の子
唐松の根もとにまろき梅雨茸
青楓プロペラ型の種とばし
天牛の右往左往や枝の先
梅漬ける古りしレシピを大切に

所沢　南雲秀子

花供物かかへ集まる盂蘭盆会
青林檎垣の内より鶏の声
荒川を渡れば青田はてしなく

池の面にとんぼの水輪重なりぬ
凌霄の咲き上りたるビルの壁
千葉　田中道江

吟行の又も殿岩清水
幾度も手を振る別れ梅雨の月
白南風や五体ひらきて皮膚呼吸
半夏生一枚売りの煎餅屋
葛餅や遺影の母の笑み給ふ
千葉　松浦陵保

さくらんぼ命の玉の輝けり
津波避難学びて後の海開き
水中に七夕飾る佐渡の沖
妖艶な男女の仕草盆踊
山開き法螺貝鳴らし始まりぬ
千葉　喜多恭仁子

梅雨晴間庭の断捨離始めたり
床の間にサムライブルーの大紫陽花
増え続く礎の名前沖縄忌
さくらんぼ五粒供へて忌を修す
青田道北総台地まつすぐに
千葉　大月玲子

あぢさゐの所狭しと路地暮し
ぼんのくぼ親指で押す梅雨湿り
晩年を涼しく生きて逝かれけり
打水や路地に光と風生まれ
沖縄忌幼がなぞる礎の名
佐倉　大内佐奈枝

天守無き濠に競へり布袋草
花了へてみな夏草となりにけり
六区街軍服も売り甚平も
ぬひぐるみ枕としたる三尺寝
草引いて老いの疲れや小半日
佐倉　三屋英俊

涼しさや茶筅水梳き風を梳き
花閉ぢて蓮祈りの時に入る
夏の夜やコニャックの香にクールジャズ
河童忌や天地ぢりぢり土用照
飛魚や銀波に散らす潮しぶき
佐倉　横川良子

荒物屋更地となりて街酷暑

獣道近道となる夏休み
沼尻の桟橋水漬く梅雨出水
白靴に老いの気概の散歩道
老鷲や投網を肩に沼漁師

四街道　奥　太雅

白鷺と五位鷺畦に相寄らず
ベランダに睦み合ふ鳩梅雨深し
風孕み枝に吹かるる蛇の衣
新茶汲む逆転満塁ホームラン
濃緑は飼料用とや青田波

四街道　塗木翠雲

昼暗き観音堂や花蘇鉄
「生きたい」と願ひし命沖縄忌
茎太き藪萱草の花明り
国生みの神のせり出す江戸の山車
宝剣の加持を受けたり祭衆

船橋　山下良江

風鈴を参道に吊る神社かな
あぢさゐの色とりどりや宮の前
黒雲へどんと置かるる大茅の輪
裏隣の犬吠えたつる梅雨晴間
植木屋の便りの届く若葉寒

船橋　久保村淑子

日覆や光の綾の風に揺れ
生垣は昼顔ばかり小学校
ががんぼを取り逃がしたる雀かな
白々とどこか寂しげ夾竹桃
下校の子田んぼの脇の蛙捕り

船橋　片桐帆一

草取の一歩田んぼに踏み入れし
しもつけの花が目印山下りる
どくだみは裏の日陰と決めて咲く
老いの目に炎天閻のごと深し
足止めて虫の声聴く船溜り

船橋　宮本加津代

わが歳をわれが驚く小暑かな
銅線のごとく蚯蚓の乾びをり
街路樹の風膨らんで影涼し
夕焼や切絵めきたる富士見ゆる
仏間より闇を伝ひて百合匂ふ

船橋　中嶋久登

伊豆の海女天草抱へ息深く
長電話どこで切るやら心太
青茅の輪ゆつくり抜けて鳥居抜け
慰霊の日礎の名追ふ婆と孫
七夕や宇宙の奥へはやぶさ2

柏　山本とく江

蓮の風蓴に垂るる金の蕊
見えますか正にこの世の蓮浄土
夜更しの窓より凛と梅雨の月
母と子のひそひそ話花氷
沼杉の梢に一鳴き行々子

柏　内田郁代

境内に売り声高き鬼灯市
夏草や利根川の川幅狭めたる
電線に日がな鳴きつぐ四十雀
塀越えて垂るるばかり凌霄花
側溝にするりと消ゆる金の蛇

柏　古川京子

大窓の静かな雨のみどりかな
海風の中空を揺れ夾竹桃
大波をゆがみてかはす海月かな
潮湿り雨の湿りの梅雨茸
崩れ巣に片足しかと燕の子

流山　穂苅照子

大欅どこまで続く蟻の道
菩提樹に影を重ねて黒揚羽
梅雨寒や仏に触るる羽根箒
葭切の声蘆原を膨らませ
筑波嶺へ立ち上がりたり青田波

市川　奥澤よし江

青時雨折々混じる鳥の声
両の手に荷を持ち仰ぐ梅雨夕焼
俎板に生きのよさ乗せ鯵捌く
まあひとつ白玉でもと優しき目
人絶ゆる社を囲む蟬の声

東京　名和政代

釣堀を見下ろす駅舎ベルの鳴る
小学生のバケツの中の青田かな
初めてのスマホ片手に茅の輪かな

炮烙を浮かせて待つや土用灸
腹筋を鍛ふる所作や梅雨明くる

東京　藤田裕子

梅雨の蝶裏参道の坂ゆるき
随身門の真中に茅の輪匂ひたる
十薬の花居残りの帰り道
白南風や朝よりひびく槌の音
重さうな白鼻心の尾大暑なる

東京　加賀葉子

鳥金魚蟹の墓あり木下闇
校長もラジオ体操夏休み
欄干のさはれぬ熱さ鬼灯市
水の面をひつくり返し浮いてこい
酸漿の緑艶やか日を返す

東京　久留島規子

捌かれて夏至のすつぽん売られをり
町筋に提灯あがり祭くる
はふはふと饂飩啜るや半夏生
白粉花の首を垂らす雨しとど
擂り下ろし青柚の皮を天盛に
朝風に揺るる煌めき蜘蛛の糸

東京　岡村純子

老鶯や夢の終りに母の居て
雨垂れのリズム狂はず梅雨の闇
葉桜や杭に動かぬ鷺一羽
コスモスを分け入る農夫一人かな
バス停の列を離れて緑蔭に

東京　桑原優美子

河童忌や田端の坂の水銀灯
梅雨冷や少し長めの湯に浸かる
フィナーレにフィナーレ続く大花火
紫陽花に紫陽花色の水の玉
梅雨深し酸味の強きモカの味

東京　小池清晴

天守より望む曲輪や栗の花
ひび割れし尻より熟るる真桑瓜
水匂ふ鬼灯市や浅草寺
払へども纏はりつける蜘蛛の糸
片蔭の重なる狭き商店街

東京　一由久美子

夫の手のぬくもりに似て袋角
鹿の子の大き目と合ふ薄暑かな
荒梅雨や矢尻のやうな魚竜の歯
梅雨晴や胃の腑の見ゆる鯉の口
河鹿鳴く老舗の宿のうすあかり

武蔵野　砂地宏子

茂り葉や池の青空なほ細く
鎖とき門広々と夏館
水溜り越えて空へと夏の蝶
河童忌や川面に散れる大花火
枝先に紅を灯せる百日紅

武蔵村山　松井宣夫

華人街（マニラにて）妖しき店の蛇料理
日盛や大型犬の赤き舌
少年の冒険世界ラムネ瓶
佐倉より江戸まで十里道をしへ
護岸打つ小さき波の夜釣かな

町田　広瀬俊雄

大山の風吹き抜くる日除かな
そこかしこ地を川となす夕立かな
片蔭や震災跡の煉瓦塀
球場の歓声高し生ビール
氷川丸の艫綱太し海月浮く

町田　桔梗純

虫喰ひは残し青紫蘇摘む朝
鉢植ゑの稲太々と青々と
追悼の特集号や梅の雨
白百合をまとひて美しく逝かれけり
土用芽や植木屋の声ひびく朝

日野　喜多尾明子

朝霧のほどけ鮎釣る竿現るる
梅雨きのこ森に獣の匂して
森濡れて梅雨の鴉の声濁る
梅雨じめり生きもののめきて夫の耳
五花をつけ山百合の地に触れんとす
疾き雲をくぐり抜けゆく夏至の月

横浜　西本才子

酢醤油の利きたるが好きところてん
祓ひ終へ雨が肩打つ海開き

産土の石段に採む荒神輿
天袋の提灯おろし盆用意
参道の岩の根方に著莪の花

横浜　三木豊子

よちよちと歩く児もゐて海開き
鞄投げ祭囃子の練習に
青空の光集めて柿若葉
軒下に提灯点す宵祭
断捨離の一段落やわらび餅

横浜　星野信子

薬膳のスープの滾る夏土用
読み耽るみすゞの伝記草螢
香を残し手を擦り抜くる梁の鮎
古本に赤き線引く我鬼忌かな
右左巻くも巻かぬも文字摺草

川崎　大久保進

迷ひ無き写経の運び燭涼し
老鶯や膝に笑はれ男坂
遠き日の君の襟足螢の夜
夕刊の薄きを膝に端居かな
闇に聴くピアノソナタや夏の月
列島の傷みあらはにかたつむり

鎌倉　恒川清爾

束ねたる辣薤の土故郷の香
父逝きてたたみの香る夏座敷
炎天やぐつと握れる老いの杖
庭先に生りし初茄子取らずおく
行く夏や渚に残る砂の波

伊勢原　佐藤和子

浜昼顔白砂がつなぐ無人島
隠沼の風なまぬるき半夏生
金魚田に日輪揺らぐまつぴるま
曝書かな兄の遺愛の詩歌集
子燕に小さき日除してありぬ

静岡　大村峰子

ひめしやらの落花の音の潔し
湖風の花魁草の花揺する
風蘭の花を育てて落人たり
吊橋を渡り切つたり岩鏡
花山椒匂ふ湖岸へ抜くる径

静岡　宮﨑知恵美

夜の句座隣に洗ひ髪匂ふ
花山椒触るれば確と香りたり
田植せし田に笠雲の逆さ富士
燕の子顔より大き口あけて
石垣に尻尾を残し瑠璃蜥蜴

静岡　望月敏男

トルソーの胴の括れや夏来る
脳天にどかんと老いの炎暑かな
那智黒の硯ずしりと風涼し
トラックは丸太満載山滴る
隠沼を破る鋭声や行々子

静岡　藤原千代子

縁端に足踏みミシン月見草
大橋にどよめき尺の揚花火
濁流の引きし中洲や小町草
杓子庵の茅の緩みや梅雨菌
夏萩にはつかの風や杓子庵

静岡　荻野加壽子

黒南風やめまひ耳鳴り偏頭痛
沖縄忌のどの小骨の取れぬまま
動くもの動かざるもの大西日
青空より風の剝がせり蜘蛛の網
外灯に人待つ影や夏の雨

静岡　小川明美

猿除けの垣の真中の枇杷たわわ
青簾百畳の間の天井画
雨漏りの廊や土用の坐禅堂
風鈴の風に仁王の裾靡く
梵鐘の残響峡の釣鐘草

静岡　藤本節子

今年竹洗ひ晒しの空を撫で
純白の笠の一列梅雨茸
木々の間を影を散らして鳳蝶
時折は空を仰ぐや田草取
点滴のかすかな音や梅雨の底

静岡　大長文昭

胴長干す紐に五六羽燕の子
反転の鮎しろがねの色放つ
水盗む堰板の端持ち上げて

蜥蜴消ゆ人間魚雷の格納庫
少年の傘に飛ばせる梅雨きのこ
盆栽になが〳〵架かる蛇の衣
静岡　加山ひさ子
鈍色の雲の広がり田植花
雷鳴や子犬にはかに獣めく
一塁を突つ切るボール梅雨上がる
灰色の空に溶け込む梅雨鴉
食べこぼしの染み座布団に三尺寝
静岡　石川裕子
手探りで探す鍵穴酔芙蓉
植込みに入るをためらふ梅雨の蝶
夏燕いつてきますの声揃ふ
平穏に過ぎて蚊遣の灰の渦
四阿の一本柱晩夏光
静岡　本多ひとみ
参道の涼しき風を纏ひたり
日溜りの葉先に揺るる糸蜻蛉
涼しさや流るるやうな墨の文字
炎昼や鴉の声の途切れがち
山裾の古墳に降れり蟬時雨
静岡　杉澤修
谷風や山紫陽花の青しづく
夕菅の咲く山の水湧くほとり
草の波漕ぎゆく白き捕虫網
虫図鑑開きしままや昼寝の子
煮浸しの茄子ひんやりと独り酒
静岡　松永博子
川下りの脇をすいいと夏の鴨
白鷺の影ふうはりと空を刷く
浮島の影を白鷺掠めたり
夏草を分けて軽トラ走り行く
蝸牛小昼の草に動かざる
射水　成瀬真紀子
地震見舞台風見舞と続けざま
梅雨曇さびしくなれば灯をともし
フラメンコの裸足地軸を回りけり
あぢさゐの絵日傘ビルに消えにけり
五月雨や焦点合はぬけむりの木

金沢　今越みち子

美しく開く投網や鮴逃ぐる
新幹線の汽笛夕焼の鉄橋に
料亭の庭にさうめん流しかな
五合庵の走り根あらは落し文
登山靴の音駒草へひびきけり

金沢　伊藤美音子

花柚子の甘き香たたせ月出でぬ
葉柳や一息入るる車引き
日の翳り風の翳りや行々子
咲きけぶる合歓にやさしき雨の音
汗をまづ拭うて握手交はしたり

金沢　高田たみ子

白薔薇の一気にひらく今日の晴
一列となり軽鳧の子等池めざす
風青し前かがみなる法然像
梅雨晴や梅鉢紋の金瓦
万緑の隙間に白き仏舎利塔

金沢　豊田高子

乗鞍の靄の解けゆくお花畑
七彩の渦の風斬る雪加かな
ぷくぷくと眠る赤子や金魚鉢
釣殿の闇に溶けゆく恋螢
餌を嘴に波を翔ちたる小鰺刺

金沢　松井佐枝子

大瑠璃のゆつたりと蒼引きゆけり
一斉に馬場の撒水合歓の花
夏旺ん馬の尻尾に赤き紐
白波に追はれ跣足のにげまどふ
涼しさや間遠に水琴窟の音

金沢　石川純子

願ひ事高く結びて七夕竹
肩車に双手を挙ぐる螢狩
野馬追の武将の列に雲湧けり
海の日や浜に小さな砂の城
お話をせがむ瞳や夏の月

金沢　河野尚子

万の花に水音しづか菖蒲園
荒神輿怒濤のごとく坂下る
ベランダに置く椅子ひとつ星涼し

逆さまにバスの影行く青田かな
山の池葉を分けて立つ未草

金沢　道場啓子

夕さりの狭庭匂へり花十薬
梅雨空や夫背を丸め囲碁三昧
四高跡人参木の葉の涼し
薔薇園にトランペットを吹く漢
選みたる句集手にとる夜長かな

金沢　杉本年虹

をちこちに井の噴き上ぐる港町
三猿の塗りの剝落梅雨に入る
夏空へ片腕伸ばすクレーン車
ユッカ咲く昔医院のカフェテラス
青田波語ることなき忠魂碑

金沢　南恵子

鬼子母神祀りあぢさゐ明りかな
花ざくろ雨粒乗せて朱を深む
菅笠をかむり玉石洗ひをり
想ひ出とか先のこととかソーダ水
シャンソン歌手しづかに逝けり凌霄花

金沢　松下信子

入日影遍し植田を行く電車
一の橋ゆ六の橋まで五月晴
歪みたる明治の玻璃や梅雨の月
サイクリング青水無月の風の中
晩鐘や低く飛び交ふ夏燕
蟬しぐれ絶えぬひと日や大伽藍

金沢　北川禮子

新茶売る丸まるとした赤子負ひ
百歳の手折りてくるる白桔梗
子燕の菱形の口並びをり
雨上がり幽かに光る初螢
磯桶にトマト熟れをり海女の家

金沢　清水英理子

夏草や地震跡続く役場まで
朝の日を透かしすつくと古代蓮
軒風鈴鳴らず人来ぬ小半日
謙信の詩を吟じたる声涼し
洋上を忘れてしまふ昼寝覚

金沢　松田好子

一花よし群るるも美しき燕子花
境内に僅かに化粧ふ半夏生
青嶺より白き雲湧く朝ひとり
鰻食ぶ未だこれからと誕生日
楊貴妃の櫛と見紛ふ合歓の花

金沢　井端久子

放鳥の朱鷺へ青田の戦ぎけり
川風に揺らぐ置屋の麻のれん
端居して開く犀星料理集
夕焼や鏡花の道にカレーの香
時鳥啼いて青空広ごれり

七尾　谷渡末枝

朱鷺翔くる青田に遅速なかりけり
大西日肩より外すワンピース
村老いて屋根より高く立葵
曇天に蛇の蛻うら返る
銀漢や泣き砂浜をどこまでも

白山　加藤美栄子

立葵球児は校歌高らかに
泡盛に六腑の灼くる沖縄忌
峡の香の清水に放つ固どうふ
がつぷり四つ能登は沸きたつ五月場所
シャンソン美輪明宏を歌ひ銀河を逝きませり

敦賀　倉谷ます美

夏蜜柑畑に残して救急車
片蔭に花鉢寄せていとほしむ
村社への口に見上ぐる花樗
陶工の額も首も玉の汗
山羊の乳しぼる朝や立葵

敦賀　鷲田勝子

爪立てて香り飛ばせり夏蜜柑
片蔭にサラリーマンの昼休み
畑を這ふ女の腰の蚊遣香
古民家の雨戸の重し梅雨に入る
水瓶を持つ指涼し観世音

敦賀　中川雅月

球児等の汗疹痛しと水かぶる
片蔭に乳飲み子乗する乳母車
薬剤師の机に二つ夏蜜柑

夏薊崖に一点朱を極む
梅雨闇や囲碁打つ客の長居して

敦賀　中村　優

夕菅や国境まで七里半
草野球外野の芝に庭石菖
端居して人生ゲーム子と競ふ
ゲートイン人馬を叩く男梅雨
教頭が焼きそばを売る夏祭

敦賀　為永香月枝

片蔭を選りて古道の石畳
開け放つ十畳二間蚊遣香
縁側の大正硝子守宮はふ
花菖蒲小粋に活くる違ひ棚
捨て舟を囲みてひらく浜昼顔

徳島　福島吉美

落ち梅の匂ふ境内句碑開く
置き薬入れ替へに来る茶摘時
菩提樹の花の散り込む鯉の池
泰山木葉がくれに咲く能楽堂
灯を低く作務衣繕ふ梅雨の入り
鉄鍋に煮込む伽羅蕗艶深む

徳島　村上和義

夏帽子脇に一礼慰霊祭
枝揺らし全身で鳴く青蛙
恋の日の一つ分け合ふソーダ水
古文書の余白に残る紙魚の痕
里の灯の落ちし谷川螢飛ぶ

徳島　宮西修一

座布団の表も裏も梅雨に入る
麦藁帽並ぶ菜園日曜日
師の句碑へ老鶯の声しきり
菩提寺の手押しポンプや百日紅
電柱の影のゆらめく猛暑かな

徳島　平岡功

入梅や瀬音の弾む渡月橋
手押しポンプ赤錆浮いて梅雨に入る
夏草の路地の地蔵と背くらべ
主なき庭の夏草あるじなり
陽の光ぎゆつと詰め込むさくらんぼ

一点に光集めて蓮の花　石井　木内マヤ

甚平の親子と出会ふ橋の上

隠し味自慢の母の夏料理

豆飯の豆が苦手と言ひだせず

白鷺や鎮守の杜の大木に　小松島　岡田あゆみ

万緑の底に拾へる鳥の羽

あぢさゐや顔の崩れし摩崖仏

鳧鳴くや田のまん中に小さき墓

梅の実の落つる境内句碑開き

切支丹地蔵を覗く梅雨の闇　松山　入河大河

紫陽花の赤濃くなりぬ交差点

念仏や入道雲のむくむくと

くちなわのとぐろのままに息絶えて

空青し蜥蜴の登る塀高く

残業の火照りをさます虫の声　福岡　宮田千恵子

涼風の一直線に走りくる

栄螺焼く玄海の潮零さずに

テロップの流れては消ゆ梅雨の地震

初夏や突然に来る変声期

草を刈る筑後平野のはづれかな　長崎　丸本祥夫

早苗田の風一列に過ぐる道

栗の花戸毎に引ける峡の水

蚊喰鳥大地に影の失せてより

蓮浮葉沈まぬやうに歩む亀

まさをなるそらのきはまで麦畑　西海　山下敦子

急坂の急流となる夏の雨

木下闇ぬけて眩しき大村湾

夏蝶の我に続くや九十九折

梅雨あがる八百ミリの雨のあと

マリア像白し外海（そとめ）の原爆忌　宮崎　中山宣

花びらの絞り模様や黄の菖蒲

欄干に残されしまま夏帽子

夏蝶の指から胸に這ひ上る

土塁満たすどくだみの花隙間なく
結葉や光かすかに届きたる

宮崎　中山芳教

天つ日の古事記の里の白菖蒲
鳴き捨てて木霊残して杜鵑
父の日に薬の日付け確かめり
鳰の浮巣都心の池に人集り
風まとひ分蘖すすむ青田かな

宮崎　鳥居達史

墳墓めく掩体壕や沖縄忌
引揚げの駅舎残りて蟬時雨
万緑に挑みし父の山ンング(ヤマ)鍬
熊除けの小鈴も鳴りて山開き
記紀の道縁に綻ぶ落し文

那覇　中本清

光解く白蓮の風朝の風
芭蕉布や句読点無きおもろうた
茂り葉を払ひて木洩れ日を拾ふ
生き急ぐ影の歪や水馬
倦怠や夏の真昼を豚眠る

那覇　辺野喜宝来

とうすみや乗合船の風を聴く
ひらひらと木陰を湧けり川蜻蛉
爆睡のアグーと分かつ夏木立
白南風や壁画に海の蒼満ちて
白壁に向日葵の影濃かりけり

※アグー……琉球在来種の豚

西原　宮城勉

吾もまた黄泉へ往路よ道をしへ
位牌守るのみの小家やパパヤ熟れ
素足投げ網繕ふや舟揚場
蟻の道石敢當(いしがんとう)を折れ曲がり
香水の看護師の押す車椅子
老いひとつ繋ぎ涼しよ誕生日

豊見城　渡真利真澄

夏潮に魚垣透ける荒磯かな
したたりや石の香炉に磐座に
厳伝ひ真清水海に注ぎけり
蟬しぐれ供華売る小屋の無人なる
洗濯物硬く乾ける大暑かな

手と本が見えてをるなりハンモック
田舎家の裏庭しんとダリア咲く
落書の大書の壁や大夕焼
屋根やねの昏き重なり遠花火
さやさやと苑に水音夏の果て

ベルリン　鈴木波江

〈お詫びと訂正〉

9月号に掲載した作品中に誤りがありました。深くお詫びして訂正いたします。

9ページ　前田貴美子さんの一句目
（誤）水にふれ木根にゆれて六月来
（正）水にふれ気根にゆれて六月来

16ページ　田中道江さんの三句目
（誤）山野草の花の寺なる杜鵑草
（正）山野草の花の寺なる杜鵑

22ページ　藤原千代子さんの四句目
（誤）蜜豆や昔がたりの始まりぬ
（正）動物病院茅花流しに白布干す

最近の名句集を探る　座談会
大西　朋
田島健一
なつはづき
司会＝筑紫磐井
益岡茱萸『雨の器』
依光陽子『ふ、は鳥に』
板倉ケンタ『一花一虫』
巻頭三句
星野　椿／中村雅樹
遠藤由樹子／花谷　清
山下幸典／平賀節代
俳句と短歌の10作競詠
古田　秀＋霧島茉莉
人と作品
曾根　毅　句集『十翼』
浅川芳直／仙田洋子
高野ムツオ／星野高士
LEGEND 私の源流
殿村菟絲子
――絢硝子・和田順子
新連載
井上泰至　俳句小説・ウラヌスの鬣
橋本喜夫　写生はレトリック
好評連載
伊野孝行　人はなぜ風景を描くのか
小川楓子　俳壇ランドスケープ
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句へのまなざし
藤村公洋　俳句のつまみ
神作研一　てのひらの江戸――古典籍を旅する
毬矢まりえ　諸家書架
石井隆司　たもとほる　俳句よもやま話
山本　潔　一望百里
俳句四季　Haiku Shiki
2026年10月号　9月20日発売　定価1300円（税込）
https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

同人作品の佳句

江見悦子選

鴛鴦涼し小島の木蔭草の蔭　紅露恵子
仏壇の一灯だけの夕端居　髙橋ひろ
白鼻心に西瓜とられてしまひけり　売野　緑
「生きたい」と願ひし命沖縄忌　塗木翠雲
まあひとつ白玉でもと優しき目　奥澤よし江
夫の手のぬくもりに似て袋角　一由久美子
梅雨きのこ森に獣の匂して　喜多尾明子
遠き日の君の襟足螢の夜　大久保　進
隠沼の風なまぬるき半夏生　佐藤和子
反転の鮎しろがねの色放つ　大長文昭
フラメンコの裸足地軸を回りけり　成瀬真紀子
一の橋ゆ六の橋まで五月晴　松下信子
水瓶を持つ指涼し観世音　鷭田勝子
落ち梅の匂ふ境内句碑開く　福島吉美
芭蕉布や句読点無きおもろうた　中本　清

同人会だより

オンライン同人句会

小池清晴

オンライン同人句会の担当が、7月から小池清晴から北浦詩子（北海道）に替わりました。オンライン句会の創設者である沢辺たけしから数えて3人目になります。コロナ禍で句会の開催が中止に追い込まれる中、沢辺さんがこのオンライン句会を立ち上げたと聞いております。立ち上げから軌道に乗せるまでの苦労は察するに余りあります。

そして、小生が担当してからわずか1年あまりですが、高齢化の進む「万象」にあって、出来る限りＩＴの力を借りて作業の効率化を図りました。しかしながら、担当者だけで出来る事には限界があります。投句・選句・結果のメール送信を月1回で済ませるためには、オンライン句会参加者の協力を仰がざるを得ませんでした。

そして今、北浦さんに無事バトンタッチ出来たことに安堵しております。今回の引継ぎはメールのやりとりのみで行いました。今後は、オンラインの対面句会もあり得るのではないかと思います。また、支部別の対抗句会、一夜句会なども面白いのではないかと思います。オンラインならば費用や手間暇をかけずに行えるのが利点です。

◆参加申込はメールで事務局（北浦詩子）まで、

メールアドレス　uta.mahalo2@gmail.com

電　話　番　号　090-8708-0361

・申込の方には事務局より操作説明書とパスワードをお送りします。

8月の「万象」オンライン同人句会高点句

3 舟底に稼ぎを分ける鮑海女　谷渡　末枝（七尾）
3 風死すや八角匂ふ裏通り　中村　千久（志木）
3 黙祷の影を失ふ炎天下　荻野加蓉子（静岡）
4 夏旺ん土偶は乳房尖らせて　穂苅　照子（流山）
4 街を行く靴の底より来る暑さ　村上　和義（徳島）
4 逆光に浮かぶ蜘蛛の囲ペンタゴン　北浦　詩子（札幌）
4 遠き日のＢ寝台の帰省かな　大久保　進（川崎）
4 脱走の南瓜の花を連れ戻す　奥　太雅（四街道）
4 戦禍なき八十余年雲の峰　恒川　清爾（鎌倉）
4 空ばかり広きあの日の草いきれ　山下　敦子（西海）
4 独り居に慣れ来し暮し盆の月　山本とく江（柏）
4 水槽の狭しと太る金魚かな　片桐　帆一（船橋）
3 手と本が見えてをるなりハンモック　鈴木　波江（ベルリン）
3 赤松を一尺のぼり空蟬に　芝宮留美子（佐野）
3 片蔭を抜けて猫の背尖りけり　荻野加蓉子（静岡）
3 かなぶんの死んだふりして充電中　宮西　修一（徳島）
3 夜釣人隣のバケツそっと見る　松井　宣夫（武蔵村山）
3 四阿にひとり仮寝の夏遍路　村上　和義（徳島）
3 羽抜鶏ごくりと水の通りけり　宮西　修一（徳島）
3 鎮魂の白き花火に手を合はす　成瀬真紀子（射水）
3 過疎の村幟を立てて夏芝居　名和　政代（東京）
3 客船は大きな揺りかご星月夜　清水英理子（金沢）
3 保険屋が遠き死を売る酷暑かな　山本　右近（さいたま）
3 梅花藻の花なびかせて水のこゑ　中條　睦子（金沢）
3 子かまきり地震の地割れの草の上　柳澤　宗正（横浜）

（＊句頭の数字は点数を示しています）

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞（八月号）

神田美穂子

花束の良き色卒寿の薔薇の色　岡本敬子

いつお会いしても穏やかで知的で、全く卒寿という年齢を感じさせない作者。卒寿のお祝いに薔薇の花束が届いたのであろう。いかにもお祝いに相応しいお好みの色だった。一句から作者の喜びが伝わってくる。岡本敬子さんおめでとうございます。これからも増々お元気で俳句を続けてください。

耕して畝のあはひの立ち話　髙野松風

本格的な農業ではなく、市民農園のような所の一齣か。お互いの農作物の情報交換なのか、又は世間話なのか。「畝のあはひの立ち話」に野菜作りを楽しむ和やかな風景が見えて来る。

ひとしきり沼を揺さぶる乗込鮒　阿部澄

以前上野公園の不忍池で鯉の凄まじい光景に出会った。その迫力にしばし足を止めて見てとれていた記憶がある。「沼を揺さぶる」という少々大げさともとれる措辞がかえって実感のある一句となった。

釜の底浚ふおかはり筍飯　山本右近

上五の「釜の底」の措辞に想像されるのは羽釜。実際は電気釜なのかもしれないが、「釜の底浚ふ」に豪快さを感じる。羽釜で炊いたご飯の記憶のある人にとっては懐かしい思い出であろう。筍飯の炊き上がる時の音、湯気、匂いまでが想像できる。食べ物の句は美味しそうにを実践した句である。

たつぷりと光に濡れて柿若葉　穂苅照子

説明するまでもなく、一読景が見える句。「光に濡れて」は誰もが表現したかった景であろう。作者の豊かで柔軟な感性で探り当てた言葉であると思う。

汕頭（うづ）のハンカチも入れバッグ閉づ　藤田裕子

汕頭刺繍は中国の港町スワトウの人間文化遺産と言われ、卓越した手刺繍である。作者はお出かけのバックの最後にお気に入りの汕頭のハンカチを入れた。たかがハンカチ一つだが、お気に入りを入れて出かける弾んだ心が余すことなく表現されている。

イヤリングに海風を聞く清和かな　加賀葉子

耳元に揺れるイヤリングに海風を感じている作者。自分の感覚を大切に、自分の言葉を信じて一句をなした。4月の清らかで爽やかな季語「清和」も絶妙。

机上の蟻われに逃がす日殺むる日　喜多尾明子

作者は「万象」誌の校正の第一人者。「万象」誌は作者の校正の確かさに助けられている。たぶん校正をしている机上に蟻を見つけ、その日の気分によって対応は変わるのであろう。どなたにもこんな気持は経験のあることだと思う。句材は身の回りを見回せばまだまだあることを学ばせていただいた一句。

上京の話弾めリ葱坊主　大村峰子

作者のお住まいは静岡市の山間部で、JR静岡駅から車で山道を2時間以上はかかるダムの村。東京日帰りなど困難な土地柄、「上京」という少々大仰な言葉が使われるのだと思う。身近な人との会話の中で上京の話に及び、話が弾んだのであろう。仕事なのか、所用なのか、お祝い事なのか、それとも進学就職で上京するのか不明だが、話が弾む内容だったことは確かである。「葱坊主」の季語から察するに大学進学かなと勝手に想像した。17音から様々に想像が広がる句。

薔薇剪るや袖を放さぬ刺ひとつ　藤本節子

薔薇の刺はなかなか手ごわい。手入れをしている時に刺で腕や指をひっかかれる。庭の手入れをした時の実体験から生まれた句であろう。「袖を放さぬ刺ひとつ」で類想感を回避し、映像がしっかりと見えるリアリティのある一句となった。

亡き夫は企業戦士やメーデー歌　加山ひさ子

メーデーは5月1日に行われる国際的な労働者の祭典である。日本では労働組合などが中心になり、デモ行進や集会が行われる。作者は「メーデー歌」を耳にした時、亡き夫もかつて夜遅くまで働く「企業戦士」だったことを思い出した。正に夫恋の一句となった。

母の日や声は乙女の九十路　成瀬真紀子

作者の母上は、金沢の同人今越みち子さん。90歳を超した今も、毎月「万象」誌への投句を欠かさず、オンライン同人句会への投句も怠らない。勿論作者の手を借りてのことだけれど、そのバイタリティーには感服である。この句にあるように実に可愛らしい乙女のような声でお話をなさる。この句は母の日のお祝い句として最高の贈り物となったと思う。

畳目の寝押しスカート昭和の日　岡田あゆみ

私も中学高校の時セーラー服の襞スカートの寝押しをよくしたものだ。どの位の間隔でやったかは遥か昔のことなので覚えていないが、私は畳目が付かぬように畳の上に紙を一枚敷いてスカートの襞を整え、自分の布団を敷いた記憶がある。その後制服の素材の進歩や襞加工の技術の進歩により寝押しは必要なくなったようだ。寝押しをした世代の私たち女性からすれば、「昭和の日」の季語は動かない。このような何気ない日常の記憶から句材を探り当て、「畳目」という眼目を掘り起こす事ができたのは作者のお手柄である。

暗闇に蜜柑の花の気配あり　入河大河

現在故郷の松山市の島に帰り、悠々自適の生活をしておられる作者。愛媛県と言えば「蜜柑」の栽培が盛んで身近なもの。きっと自宅の傍にもみかん畑があるのだろう。蜜柑の花が匂うと言わず、「気配」としてありふれた表現を免れた。闇には殊更に匂いが濃くなるという感覚も、作者の今の故郷での生活の中で気づいた実感であろう。

秋茜

道場啓子

窓に射す光は四角秋茜
軒に垂れ音符めきたり吊し柿
新秋の一枚羽織る雨上がり
夕空を昇り来る月れもん色
小春日の雀無心に地をつつく
雪吊の武家屋敷跡灯ともりぬ
夫と来て今年も京の紅葉時
枯れすすむ里に野猿の屯して
図書館の半纏木の枯れ極み
冬近し早や夕影の千代尼塚



秋、「太陽は漸次南下し、昼は短く夜は長くなる」と辞書にある。スポーツの秋、読書の秋、食欲の秋でもあるが、寒さに弱く、運動もからっきし駄目な私には、とても喜べない季節なのである。

俳句にご縁があって、30年近く経っているというのに、春夏秋冬どの季節も作句に悩まされ通し。月3回の句会は、ご指導くださる先生、句友の皆様のお蔭様で、今日に至っております。「万象」の諸先生方には、心より感謝申し上げます。

高千穂夜神楽

中山　宣

高千穂の太古の郷に神迎へ
神立や天安河原葛折
神楽の里劈く太鼓峰の家
愛(は)しきやし出稼ぎ漢の神楽舞ふ
子の役目番付捲る神楽宿
猪狩を敬ふ氏子山の神
舞ひ終へて休む奉仕どん大欠伸
カッポ酒注ぐ青竹薬喰
夜神楽を舞ひ終へ稚児の深眠り
粉雪舞ふ茅屋晴れゆく夜明け前



冬も本番。宮崎を代表する夜神楽と言えば「国重文」の高千穂夜神楽。集落外からの見学者も、一晩限りの住民という意味の一夜氏子として受け入れている。

例年11月から翌年2月にかけて約20の集落で奉納され、県内外から客が訪れる。一夜氏子への礼儀は地元の焼酎二本である。

山里の極寒の地元のもてなしは、竹筒に焼酎を入れて温めたカッポ酒、煮しめ、猪肉の振舞い等。神と舞い遊ぶロマン溢れる夜神楽は宮崎の冬の風物詩である。

特別作品評 (8月号) 荻野加壽子

鴨の子　紅露恵子

引鳥や大河の青に身をゆだね

秋冬に渡って来て日本で冬を越した渡り鳥たちが北方の繁殖地に帰っていく。鶴や白鳥、雁などの大型のものから鶫、鶸などの小鳥まで種類は多い。

「大河の青に」で俯瞰した風景が、「身をゆだね」でこれからの長旅が無事であるようにと案ずる作者の思いも重なる。

寄り添ひて鴨の子深き眠りかな

日本で繁殖するのは主に軽鴨と鴛鴦。掲句の鴨の子はおそらく軽鴨の子だろう。大きな堀などへの引っ越しに親鳥についていく子鴨の可愛い姿が毎年ニュースに取り上げられている。安全な場所にたどり着いた安堵感だろう。「深き眠り」に向けられるやさしい眼差しが感じられる。

凌霄花の散り際の色散りし色

凌霄花は蔓性落葉樹である。樹木や壁などに絡みついて橙赤色の花をつける。まさに夏の花である。その散り際は花の色をとどめているがしばらくすると色を失う。その変化を中七下五に詩の言葉で表現している。

夕風のいざなふ彼方白木槿

木槿は夏から秋にかけて一重または八重の薄紫、薄紅、白色などの花をつける。朝開き夜はしぼむため人の栄華の儚さに例えられる。中でも白木槿は夏の暑さの中で清涼感や静けさを感じさせることから俳句に多く詠まれている。「夕風のいざなふ彼方」にすでに一日花である白木槿の終焉の時が訪れている。昼の華やかさはもう無い。

さて作者はそれぞれの句に「色」を鏤めている。それゆえに読み手に対象が生き生きと映像として迫って来る。

金婚旅行　中村優

宍道湖に沈む夕陽や蜆汁

金婚式おめでとうございます。ご夫婦がお元気で、そして子供さんご家族と揃っての旅行はきっと最高の思い出になったことでしょう。またこの旅行を俳句という形に残せたことも素敵なことだと思います。

さて宍道湖と言えば「蜆汁」。それだけなら句として物足らないが「沈む夕陽や」で美しい景を共有できた。

露天風呂独り浸りて座禅草

家族と離れて露天風呂に浸る作者。喜びもご苦労もたくさんあった50年だっただろう。季語の「座禅草」の姿と重ね合わせてしみじみとした思いが伝わってきた。

春日傘萩焼求め鍵曲

「鍵曲」を知らなかった。「鍵曲」は左右を高い土塀で囲み道を直角（鍵の手）に曲げた城下町特有の街路で一見行き止まりかと思わせるような見通しのきかない独特の道筋。昔日の面影の残る萩の街には、いくつかこのような散策の道があるらしい。

春日傘をさしているのは奥様か。お好みの「萩焼」を熱心に選んでいる姿が浮かんでくる。

風薫る城下の小路海鼠壁

「海鼠壁」は壁面に平瓦を並べて貼り、瓦の目地に漆喰を蒲鉾形に盛り付けて塗る工法で、その目地の形が海鼠に似ていることからその名がある。静岡でも下田市や伊豆の松崎町に見られる。

掲句は城下街の昔を偲びながら散策していると、若葉を揺らす軽やかな風が吹いてきた。その季節の変化を素早く感じ取った作者であった。

俳句カレンダー掲載句自註

令和8年版俳人協会『俳句カレンダー』に掲載された句と作者による自註を順次ご紹介いたします。

海光を砕く芭蕉の破れやう（10月）前田貴美子

芭蕉は沖縄ではごくごく身近な植物である。街路樹の椰子の隣に堂々と背を伸ばし、実芭蕉・バナナを撓に実らせていたりする。那覇の街中、車が行き来する道端の芭蕉の蔭で、授乳する猫の親子を見た時はさすがに驚いた。芭蕉に吹く風、その下蔭は心地良くきっと安心できる場所だったのだろう。しばらくの間、筆者も共にその微睡の時を過ごした。

「破れ芭蕉」。角川俳句大歳時記によれば、「夏に解き広げられたみずみずしい緑の葉は、裂け尽くし、破れ尽くして落莫たる風情となる」とあるが、いやいや沖縄の芭蕉は、裂け尽くし破れ尽くしてもその緑葉は明るい。

庭で採れたからと、バナナを房ごといただくことがよくある。島バナナは、黒ずんで見て呉れが悪くなってからが美味しい。最近近くのケーキ屋の店先に、「豊作のため半額‼」で売られていた。

沖縄にも秋の訪れを告げる「新北風（ミーニシ）」が吹き、冷たい海風に打たれながら甘蔗を刈る冬の風景はあるが、芭蕉大葉は見事に「海光を砕く」「破れやう」のままに、その緑の葉を立て通す。



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に貝偏の漢字を入れましょう。

1 小萩散れますほの小□小盃　松尾芭蕉
2 月天心□しき町を通りけり　与謝蕪村
3 萩咲て家□五円の家に住む　正岡子規
4 去年今年□く棒の如きもの　高濱虚子
5 ひらひらと月光降りぬ□割菜　川端茅舎
6 風に落つ楊□妃桜房のまゝ　杉田久女
7 蓬莱に能登で拾ひし□と石　沢木欣一
8 雲ふるるばかりの花野志□の奥　細見綾子
9 濁り酒飲んで将門□□かな　内海良太
10 茄子の苗つくづく見しが□はざりき　飛高隆夫
11 じやんけんで□けて蛍に生まれたの　池田澄子
12 夏惜しむ□殻に耳押し当てて　黛まどか

【正解】
1 貝　2 貧　3 賃　4 貫
5 貝　6 貴　7 貝　8 賀
9 贔屓　10 買　11 負　12 貝

沢木欣一の指標と信念（四）

中山純子

（承前）

ここに「風」主宰の言としての最近の短文がある。

「俳句は定型詩である。十七音定型を厳密に守るのがよい。季語は重要で季語の本情の理解が大切である。句作の態度、方法は、写生が基本である。詩因（感動）があっての写生、言葉は単純・平明・的確」

（『現代秀句選集』別冊俳句、平成十年九月、角川書店）

まことに簡にして要をなす言葉で、しかも、これは、拙文の最初にあげた半世紀前の欣一選後感の要旨とも受けとれ、主宰としての信念というか徹した姿勢に襟正するものがある。

あとはわれわれ一人々々がこれをどのように咀嚼し、自分の目の高さ、自身のオリジナリティを養い開花させてゆくかにかかっているわけだが、これは本をたくさん読んだから会得できるというものではあるまい。

腹の子をこぼして蜑の崖登る　北村　保
畦を焼く地下足袋に水かけ通し
むかご蔓枯れて光れり伊賀の奥

「風」の実技表現「即物具象」の手本のような北村保句集『伊賀の奥』が、その地道に精進の結実として、平成十年度の俳人協会新人賞に輝いた一事はまだ耳新しい。

『伊賀の奥』は、一口に言えば、あるべき俳句の源泉のような素地のよろしさをもつもので、この素地の源泉とは、たぶん、遡（さかのぼ）りたとりゆけば子規の写生の本意にゆきつくのであろう。

俳句人口がふくれあがり、量産と多様化にながれる今日だからこそ、子規の写生精神にいま一度触れ直す必要がある。

（この稿、了）



『子規・写生―没後百年―』（沢木欣一編　角川書店）より抄出

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ㊳

橋本 清

今回から巻七に入ります。雑歌・譬喩歌・挽歌、計350首を収めています。左注に「柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ」とある歌が56首ある以外、作者名の注記がありません。

春日山　おして照らせる　この月は
　妹が庭にも　さやけかりけり　（七・一〇七四）

「春日山の上から下界を隈無く照らしていたこの月は、あなたの庭にも明るく輝いているなあ。」

何と幸せな歌でしょうか。山月が明るく照らすのを眺めつつ、愛する女性の許にやって来た男が、その庭を照らす月光の美しさを讃えています。これは君と一緒に見ているから一層美しく感じられるのだと、相手の女性への思いを言外に匂わせているのです。

「おして」のオスは、満遍なく押し及ぼすということ。「春日山」は、奈良市街の東部、三笠山を中心とした山々の総称。

英語の授業で、I love you. を「我君を愛す」と訳した学生に、日本人ならそんな言い方はしない。「月が綺麗だ」とでも訳しておけば、かえって気持ちが通じると教えたという話が、英語教師時代の夏目漱石の逸話として伝わっています。この話の出所は不明ですが、日本語のネイティブ・スピーカーなら、なるほどとうなずく話ではないでしょうか。

日本人は自分の思いをストレートに伝えることをあまりしません。何か別のことに託して、それとなく言ったりする。すなわち、直接的な言い方をなるべく避ける。相手が目上の人や、大切に思っている人の場合は特にそうです。妻が夫に、「お茶が入りましたよ」とは言っても、「あなたのためにお茶を入れました」などといった、その行為が相手に直接関わる感じの言い方は普通しません。

やすらはで寝なましものをさ夜ふけて
　かたぶくまでの月を見しかな　（『後拾遺集』六八〇）

『百人一首』にある赤染衛門の歌です。

今夜は明るい月夜。こんな美しい月をあなたと一緒に眺めたら、どんなに素敵だろう。けれど、夜はすっかり更け、折角の月は西に傾いてしまった。こんなことならぐずぐずしていないで、さっさと寝てしまえばよかった。訪れを待っていたのにやって来ない男への恨みを、月に託して訴えているわけです。

面白のお月やな、二人見ばなほ（日本古典全書『近世歌謡集』）

江戸初期の流行歌謡、隆達節（隆達小歌）の一首。赤染衛門の歌を極限まで圧縮したような歌詞です。

万象ノオト

テーマ『エアコン』

クーラー部屋

横浜　大駒泰子

エアコンは「霧ヶ峰」、「白くまくん」、「大清快」のように、涼しさを売りにしたネーミングが多いですが、40年程前我が家に取り付けたエアコンは冷房だけのクーラーでした。性能が評判だったダイキン製。長らく使いました。

私たちの寝室に一台だけ。あの頃は今より暑くなく熱帯夜という言葉があったかどうか。寝苦しくなりそうな夜は、「今夜はクーラー部屋」の一声で十畳に親子5人が枕を並べ眠りにつきました。楽しかった思い出の一つです。

今我が家には3台のエアコン。以前は一人の時につけるのは勿体ない気がして我慢したのですが、老い先短いのに快適に暮らせねばと、最近は「除湿50％」に合わせて、日がな一日つけています。

学校のエアコン普及

静岡　海野俊彦

私は元理科教員です。夏、学校は大変暑いところです。気温も高いのですが、人間の体温もばかになりません。いくつかの夏の思い出があります。

火気を使った理科実験は窓も開けられず汗だくでした。給食の時間は熱気の中、誰も話さず黙々と食べるだけでした。また、テストの採点をしている時、答案が汗で濡れたり腕に絡まったりして困りました。平成に入りようやく職員室だけエアコンが設置されると、生徒は用もないのによく話しに来たものです。

近年、地球温暖化による健康被害も増加しています。令和に入り全教室にエアコンが設置され素晴らしい環境となり、授業に集中して取り組めるようになりました。今後、特別教室（美術室や理科室など）や体育館への設置が出来るだけ早く進むことを期待しています。

教室のリモコン

大和　中谷由郁

高校で授業をしていると、季節の変わり目に必ず始まるのが教室の温度調節問題だ。前方の席の生徒が「先生、寒いです。温度を上げて下さい」と。そこで、私はリモコンで1℃上げる。暫くすると、後方の席の生徒が「先生、暑い！　サウナみたい」と。エアコンでは折り合いがつかないので「では窓を少し開けましょう」と提案すると、今度は「先生！　虫が入ってきた。早く捕まえて」と教室中大騒ぎ。仕方なく虫を追い払い、窓を閉める。次に教室のドアを開けると「先生の声が廊下まで響いてます」と。私はそっと溜息をつく。

結局、教室の温度調節は、壁に埋め込まれた白いリモコンに頼るしかないのだ。毎年、夏から秋、秋から冬へと移ろう教室で、私は常にリモコンと向き合っている。

我慢大会

武蔵村山　松井宣夫

最近では見かける事が少なくなりましたが、真夏の我慢大会。締め切った部屋に厚着して炬燵に入り鍋焼きを食べるといった大人の遊びです。

私が高校生の時、友人が免許を取り、父親の古い軽自動車が我が家に来ました。エアコンなしです。暇な高校生はすぐに他の連中も誘い、男4人のドライブです。

その時私が「我慢大会やらね～か?」と提案、今ほどではないものの、真夏の炎天下、窓を閉め切りヒーター全開。すぐに反対派が出ると読んでの提案でしたが全員が賛成。最後は車がオーバーヒートを起こし勝負は付きませんでした。再挑戦は行われませんでした。

自衛隊基地と学校

国富　山口孝治

「冷たい空気が入ります。廊下や教室等、周りの窓を閉めて下さい。」校内放送が流れると、子供たちと私たち教員が、嬉しそうな表情をして窓閉めを行っていました。今から30年位前の話です。

新任教員として勤務した学校は、当時としては数少ないエアコン完備の学校でした。自衛隊基地周辺にある学校の防音対策として設置されました。

あれから30年。今では全国の学校の教室にエアコンが設置されています。毎朝、子どもたちが汗をかきながら登校して来ますが、エアコンの効いた教室に入るとホッとした顔になります。そしてランドセルを下ろして、朝の準備を行い、子どもたちの一日が始まります。

エアコン事情

成田　宮本うらら

昨年からだろうか、夏は各地で40度を越えるようになった。伊勢崎で41.8度、国内最高気温を更新した日、都内も36.6度を記録、歩いていると経験したことのない息苦しさを感じ、用事を済ませると早々に帰宅した。

ところがエアコンから冷風が出てこない。数日後ガス補充の応急措置が完了。何時また抜けるか解らないガスを頼りに、翌年夏の最新モデルを待つことに。そして翌5月、俄かにエアコン2027年問題が持ち上がり、エコン売り場は駆け込み活況。慌てていると、折からのホルムズ海峡封鎖により、エアコンまわりの原料ナフサ不足が追い打ちを。私たちの暮しは何と儚い土台の上に成り立っているのか。納品は1ヶ月半待ちとなってしまった。

「万象ノオト」投稿募集

▽2月号「スリッパ」(10月末日締切)
▽3月号「　肉　」(11月末日締切)
▽長　さ　本文　17字×19行以内
▽投稿先
〒417-0861 富士市広見東本町14―14
神田美穂子

巻頭作家（九月号）プロフィール



宜野（よしの）　顕（あきら）

（宜野湾）

顕さんが、ふう句会に入られたのは令和6年の春。「万象」へは8月号から投句をされている。ふう句会では、吟行句会（当日及び後日句会）を含め月に5回の句会を持っているが、入会以来彼はすべての句会に参加。皆勤である。運転担当もおまかせしている。

若夏や首里に御後絵の戻りくる
組踊の稽古涼しき月の庭
八月の月へ女綱の美ら飾り

座より起つ空手演舞や月見酒

島人が受け継いできた、今も身近な琉球文化を詠む。美しい句群である。

潟風に雨の兆しや枯れ芙蓉
黒潮に万古のうねりつばくらめ
海風へ甘蔗穂の光刈り落とす
朝がすみ磯を離るる手漕ぎ舟
歯朶刈や川の流れのゆるきこと

島のたつきや風景との対峙。確かな季語の選択。調べもゆるぎない。

冬日燦コザの裏町ばくれん猫
夜濯の漢が干せる妻のもの
日焼兵タトゥーに神の御言葉を
夏ぐれや暮しに島の季語ひろふ
友来る猪罠のこと基地のこと
溢れたる金平糖に聖樹の灯

日常詠は変化に富む。「暮しに島の季語ひろふ」のは正に顕さんの常なる作句姿勢である。

ほうたるや斎場御嶽（セーファーウタキ）に雨後の闇
梅雨晴や環礁（イノー）に濡らすスニーカー
じゃんけんで水羊羹の桃得たり
明易し草稿本の朱線あと

投句開始からの二年間で、良太及び江見主宰の「万象作品の佳句」に、13句の鑑賞を得る。そしてこの度の、9月号巻頭4句である。

顕さんは、島根大学卒業後、ホノルルのシャミナード大学国際研究科に編入し卒業。その後沖縄県東南アジア留学生第一号として、マレーシア農業大学に入学修了する。仕事は長く沖縄県国際交流・人材育成財団に勤める。アメリカ合衆国の永住権も取得されている。（平成3年返却）

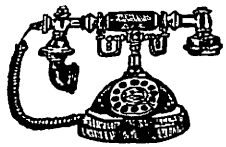
豊富な経歴と体験をもつ顕さんの日常の出会いへの対峙の有り様は、決して拳をあげることなく、しかし確かに、しかし穏やかに、人々を、この島を抱く懐の深さである。吟行での出会いに常に感動の言葉を語る彼である。

かつてアメリカ永住を考えた彼が、小さな島の道端の草花に寄り添い、風に身を委ねる。季語を拾い感受し、そして楽しむ。小さく大きく感動の言葉を紡ぐ。俳句の心は、顕さんの豊かな人生の歩みに、新たな日々の感動をこれからも重ねてくれることだろう。

顕さん、佳き句を……。

（前田貴美子）

万象作品



江見悦子選

朝焼の浜に風紋乱したり　宜野湾　宜野　顕

暁闇の腓返りや半夏生

パパイヤのはち切れさうに紙袋

○二番座の風に吊るせり青バナナ

○十薬の花白じろと婚近き　※二番座……沖縄の古民家で仏壇が置かれる重要な部屋　茅ヶ崎　久保田富士子

竹伐つて竹の匂ひのアプローチ

覚えたての文字たどたどし星祭

梅雨じめり繰りたる雨戸五十年

荒梅雨やタオルにくるむ宅配便　那珂川　髙山ひさ子

梅雨晴間庭に広ぐる釣道具

○初生りの名はとろりんと白なすび

昼寝覚胸に詩集の裏表紙

暑き夜や暴風に地震重なり来　ベルリン　森尾　舞

一輪の野ばらのグラス輝けり

○杏落ちくたれて土に還るかな

夏空や煉瓦の屋根に大男

手賀沼へ抜くる農道青田風　柏　村田由美子

梅雨晴間井戸端会議始まりぬ

○蟻走るパズルのやうな煉瓦道

○は佳句に選ばれました。

老い二人いよよクーラー解禁日
明易し雀の遊ぶ厨窓　札幌　佐藤麻利子

○校長の飛入りダンス雲の峰
水撒きや犬もホースも遊びだし
転校の子の背見送る日傘かな
記念塔の跡地を覆ふ姫女苑　札幌　石田睦
籠いつぱい摘みし青紫蘇香り立つ
初夏や葉擦れの風の居間通る
花時計の交はる針にかたつむり　島崎洋
墓碑銘に絡みつきたる姫苺
読みかけの子規の句集や夏落葉
電柱の影の重たき日の盛　杉山和廣
閑けさや葉音に寄する夏の夕
緑蔭や木立に消ゆる汝の影
山々の膨らむ速さ緑濃し　杉山鈴子

○夏蓬葉裏を反し吹かれけり
夏空の雲いつぱいの水たまり
黄菖蒲や速き流れの水際に
河骨や岸より見ゆる黄の点点　竹重富子

ふぞろひの野花菖蒲に風来る
傲慢と言ひたきほどの紅の薔薇　札幌　田邊政代
原爆忌祈りの鶴の小ささよ
益荒男の振るや祭ののぼり旗
支笏湖の岸にカヌーを漕ぐ準備　土門一平
野球子に新緑の風豊平川
看板にオレンジ色さす夕焼かな　土門一平
ビール飲む度アルバイト水運ぶ
退院の父の背少し夏痩せて
短夜や胸高鳴れるサッカー戦　土門一
風涼し二ヶ月ぶりの外歩き
雨上がり万緑の山揺れ通し
昼下り皆の素麺すする音　船橋明美
お中元悩み思ふもまた楽し
地ビールに酔ふなつかしき故郷かな
深々と鳥海山の青嶺かな　新庄　曾野部礼子
つづら折抜けて雲海広がれり
水槽の泡に遊べる金魚かな
立葵一輪に雨しとどなり　大江　安藤桂花

音もなく雨降る朝や著莪の花
遅番を終へて一息星涼し
玉葱を吊る風の径通し土間　仙台　富田洋子
針の碑の寄進は女花うばら
葵咲く路地に団子屋譜代町
隧道に足音ひびく立夏かな　新潟　齋藤　信
父の杖使ふ母の背ねむの花
炎天や靴底沈むアスファルト
梅雨寒や古漬刻む朝な朝　榊原キヨ子
紫陽花の重なりあひて雨雫
○一句得て一気に含むソーダ水
常よりも早き紫蘭の深き色
一枚の鏡の如き大植田　佐藤幸示
百年の煤けし農家竹風鈴
走り梅雨都会の駅の傘の波　髙塚先子
夏蜜柑半分残すガラス皿
荒食ひの鯰の背鰭冷めやらず　山田季聴
おしやぶりの茄子漬子等のおやつなる
緋袴に揺るる木洩れ日夏祓　燕　渡辺志ま
蟻の列茎をつたひて蕾まで
庭石のくぼみに溜まるえごの花
どくだみの匂ひを刈つて安らぎぬ　芳賀　福武幸子
蔓の先支柱を探す牽牛花
ボール置き少年茅の輪くぐりたる
雑草に追はるるやうに草を引く　鹿沼　渡辺利子
やまももをどつさり落とす鳥の群
空青く雲のま白き夏至の朝
隠居して日課となりぬ草むしり　渡辺利子
雨降れと蛙鳴きをり夜明け前
草引ける我を見てゐる迷ひ猫
眠れぬ夜かちわりひとつ頬返し　栃木　飯塚キミ
○歯の浮きて六腑に浸むるかき氷
さみだれや森の深きに寄せ仏
大粒の雨に打たるる蓮の花　佐野　仲山さよ子
奥鬼怒の玻璃戸にひかる初螢
杉並木の薄暗がりや黄菅咲く　義本美智江
緑蔭や餌場に栗鼠の気配なく
雨上がる山椒魚の四肢小さき

苔の花さるすべりの木の大瘤に　小橋川和子
水面をふはりふはりと舞ふ螢　所沢　小林あけみ
菜園の胡瓜の花に華やげり　志木　汐見克彦
朝顔の赤青白の美しさ　千葉　加藤浩子
青蔦の這ひ上がりゆく壁の罅　成田　宮本うらら
静けさや岩の割れ目を滴れる　酒々井　新谷八郎
路地裏に転がるままの夏蜜柑　佐倉　有泉正夫
○蓮咲きて一天紺を極めけり　柏　鹿毛満子
蓮開く空へ光の珠はなち　船橋　近藤澄子
土用入地図の余白に鳥一羽　山口秀吉
日の盛車の先にきよんの跳ね　鈴木美根子
緑蔭や薬草園の茶のかをり　杉田富美代
肺に入る空気の薄き炎暑の日　鈴木隆久
水遣りの葉蔭より跳ぶ子蟷螂　小橋川和子
青葦の風走りゆく塩田跡　汐見克彦
夏の夜のダンサーの影廻りゆく　加藤浩子
渓流の音の響きて夏の星　新谷八郎
寝転べば捩花立てり目の高さ　小林あけみ
漁火の沖に連なり星涼し　宮本うらら
潮騒を間近に茅の輪くぐりかな　有泉正夫
巴里祭や厳のごとくジャンギャバン　鹿毛満子
父の日やぐい飲みひとつ提げて来る　近藤澄子
豆飯の香る厨へ急ぎけり　山口秀吉
電柱にからむ青蔦上へ上へ　鈴木美根子
新緑の映えて眩しき雨上がり　杉田富美代
図鑑繰る少年の眼や緑さす　鈴木隆久
荒梅雨や翠のふかき濠の水　小橋川和子
太陽の恵みの音や胡瓜食む　汐見克彦
松葉杖とれて一歩や夏帽子　加藤浩子
濡れ落ちていつそう白し沙羅の花　新谷八郎
荒梅雨や少年かたく口閉ざし　小林あけみ
夫との永久の別れや秋深く　宮本うらら
秋の日のさんさんとして窓越しに　有泉正夫
丸裸風の吹く日はベランダで　鹿毛満子
新緑の色の違ひに気づかされ　近藤澄子
五階まで来てくれし蚊を打ちにけり　山口秀吉
夏の夜の闇にエンジン吹かす音　鈴木美根子
三回忌青柿落つる音のして　杉田富美代

夏燕ひとまはりして孔子廟　松戸　石川幸子
梅雨曇木蔭の猫の澄まし顔　寿多映子
水色の蚊帳に持ちこむ子規句集　渡部洋子
初蟬の声頻りなり大欅　安藤美酒々
梅雨寒やスカイツリーの灯の潤む　東京　齊藤孝夫
をさな児の一歩を阻む大蚯蚓　長谷寺はチケット完売梅雨の月
沐浴の嬰にそうつと団扇風　大汗に友と走れる九十分
万緑にやさしかりけり今朝の雨　四葩咲く空き地となれる家の跡　高野翠子
紫陽花の毬膨らめる雨上がり　梅雨寒やＭＲＩの高き音
独り居の垣根の薔薇の満開に　○気に入りの藍の小鉢や冷索麺
○指染むる真紅鮮やか紫蘇ジュース　竹林の小径をたどる夏の暁
厳選の鉢のあさがほ濃紫　花山葵そつと添へたる刺身皿
鉄・硝子・陶の音色や風鈴市　朝早し新茶の香るお仏壇
風そよぎ土手の草花踊りたる　銭亀の重なり合へる池の石　中澤桃子
日盛の川面きらきらしてゐたる　十薬や雨に蔓延る其処彼処
雨上がりハワイの虹のアーチかな　大声の鰡背な店主鬼灯市
小さき池水輪大きくあめんぼう　半眼の露座仏に置く紅の蓮　長谷川信也
さるすべり町並抜けて名刹へ　鶏の花匂ふ苑内夕明り
夏木立覆ふ殿塚姫の塚　湧水にをどる日の斑や水芭蕉
深草の社に溢れ濃紫陽花　長谷川はるみ
苔の花山麓の雨たつぷりと
○鷹ヶ峰露天風呂より梅雨の月
名を呼んで魂に風沖縄忌　平子甲奈

水色のブラウスふはり梅雨晴間　東京　前川　昇

花柘榴スカイツリーへ雲疾き

実となるか二つばかりの茄子の花　調布　荒井　仁

胡瓜のび支柱の高さ越えにけり

初生りのトマトを半分づつ分くる

吾が膝に青条揚羽しばし憩ふ　三鷹　髙尾早弓

みんみんの序奏数ふる床の中

梅雨空や廃屋の草茫茫と

宣誓の白はちまきや五月晴　府中　竹村晃子

こまやかに紙漉く手つき梅雨に入る

代講終へはや放課後の薄暑かな

混み合へる待合室や青葉雨　南場雅子

大阪の橋より橋へ走り梅雨

山梔子の花の水辺に風少し

ふらここの揺るる腰かけ懐しき

梅雨晴間散歩の延ぶる川の道

城高くそびえ見下ろす夏の海

花火の夜小さき出合ひそこここに

縦縞の胸鮮やかな青葉木菟

運動場どかつと薬缶の麦茶かな　日野　松原悦子

濁り空押し開きたる夏野かな

炎昼や川合流の大き渦

梅雨明の跳ぬる鯉の尾光りけり

梅雨晴間早も野草の花つけて　青梅　横井一美

芝の上ねぢ花十本見つけたり

離れても匂ひの届く栗の花

さみだれやお囃子稽古途切れなく　横浜　大駒泰子

曇り空狭庭の射干拡がりぬ

公園の草地十薬匂ひ来る

○長雨や切つ先重き青芒　岡　元枝

巣を出でて一直線や親燕

雨上がり百合の香強く放ちたり

花茗荷古墳の道の道しるべ　坂本具子

水音や竹落葉散る渓の道

捨てかねつ夫の残せる夏帽子

雨上がりコンクリ光る春の宵　柴田雅春

春の暮遊園地より子ら帰る

花冷や都電のベルの響きたる

夕日さし松葉牡丹の花散りぬ　横浜　長野高朋
一列に行く茶摘女の赤襷　　大木政子
黄に熟るる枇杷や隣家に人住まず　　奥川裕美
葦切の声放置田の細波す　伊勢原　山本カツ子
○氏神の石積崩れ山棟蛇　　杉山千鶴子
青芝を蹴散らす子等やボール跳ね　　杉山巳代
出格子へ打水揺らぐ宿場町　静岡　飯田優子
新馬鈴薯のころり幼の軍手から　　小林典子
座禅堂蜘蛛の囲髪に絡まれり　　杉田義則
立ち上る煙の先の夏の星　　石川直樹
色褪せし父の日記や夏の月　　石川真利子
形代に年々増ゆる願ひ事　　伊東文恵
扇風機共に嫁ぎて四十年　　海野俊彦
捨てられぬ母と揃ひのあつぱつぱ　　※三尺坊……静岡県の秋葉三尺坊大権現。火伏せの神。
筋肉の波打つ仁王雲の峰　　
坐禅堂へ手摺べたつく薄暑かな　　
○三尺坊へぶんぶん唸る扇風機　　
夏の星大パノラマの天文台　　
黄に染まる一面の百合波打てり　　

さくらんぼ幼き手より転がりぬ　　
友の家の目印となる山法師　静岡　大木政子
○客を待つ夏座布団の浅葱色　　奥川裕美
新緑へトロッコ電車軋みたり　　小林典子
子子の跳ぬる澱や朝日差す　　杉田義則
エリザベスてふ薔薇の風くれなゐに　　
からす天狗の鋭き眼雲の峰　　杉山千鶴子
大玉の紫陽花一つ風に揺れ　　杉山巳代
広縁に月下美人の咲くを待つ　　
雨上がり庭に俯くアマリリス　　
○着地する背筋の反りやアマリリス　　
夕立過ぐモカ一杯の冷めぬまに　　
透き通る鎌振り上ぐる子蟷螂　　
赤き帯きりりと締むる油照　　
○羅を着て逢ふ人は人の夫　　
早朝の草取の輪の広がりて　　
○徽の香や抽出し奥の『銀の匙』　　
日晒しの古本めくる梅雨晴間　　
頬杖に回す青色ソーダ水　　

家康の隠れし洞の滴れり　静岡　高井明子
禅寺の野ざらしの釜さみだるる
境内に氏子五人の夏越かな
遠山の空を抱きをり夕の虹
仏壇の鈴打つ音や梅雨湿り
補助輪の取れし小二の夏休み
学校田に子らの大声青田風
夏場所や小兵力士の技光る
柿の花打つや仁王の足の甲
○子らの植うる早苗ぷつかり濁り水
深煎りの珈琲挽けり梅雨曇
ランドセルどかと放りて心天
あれこれと被りて求む夏帽子
菓子箱に空蟬ひとつ宝物
走り梅雨文庫二冊を買ひ求む
呆けたる母の顔剃る夜長かな
○提灯に亡き人の名や村祭
残さるる青のシャベルや蟠雲
韋駄天の眉つりあげて溽暑かな
万緑に梵鐘一打響きたり　永田公香

方丈を越えて泰山木の花
レース編みの前垂れふはり六地蔵　静岡　長谷川洋子
○納戸色のしげるの原画梅雨の月
老鶯の声に風鐸揺れにけり
涼しさや祖廟の畳青々と　福島章友
○商談は成らず車中の氷菓子
はたはたと三度叩きて蚊帳に入る
交差して列車の走る大西日　焼津　小梁洋子
木洩れ日に花ふくらみぬ破れ傘
夏の雲魔神の如く立ち上がる
蜘蛛の囲の雨粒きらり地蔵堂　掛川　鈴木美由紀
小判草囁くやうに風に揺れ
夏山や遥かに響く鳶の笛
種飛ばす頬つぺ膨らむさくらんぼ　川根本町　鈴木裕一
釣具屋に蟻はためき夏来る
風見ゆる場所へ籐椅子移したり
横向きに降るる階段花南天　金沢　上野冨貴子
初鰹の煮しめをあてに独酌す
ホルムズの封鎖何時まで青嵐
古き家の七夕竹に願ひ事　北野陽子

話さぬやう熊に注意の墓参
新樹光葉の濃淡に宿りたり　金沢　菅原雅子
短冊の夢ささやかに星祭
紋白蝶跳ねて幼の網の中
草を食む牛の背躾す夏燕
牧草のロール積み上げ夏野かな
競走馬の潤む眼や夕薄暑
軽やかな禰宜の沓音五月晴　宮崎恵美
○夏の海に沈みし父の命日祭　※命日祭……神道における命日のお祭り
風薫る諏国神社の命日祭　かほく　能任康子
実梅捥ぐ揃ひの法被兼六園
打撃音に湧くグランドや夏木立
早早と家事を済ませて籐寝椅子
楊梅の道に故郷の匂ひたる　敦賀　川口和代
古民家の厨くすぶる蚊遣香
梅雨上がるキャリーケースの仲間達
麦の秋鍛へ上げたる脚軽し　奈良　町田すみれ
昼寝覚雲の形を見てゐたり
○褒められて得意顔なり夏季講座
台風過川に芥を残したる　徳島　林　早苗
二度三度鰡ひるがへる裏の川
バス停にほんのり匂ふ蓝日傘
参道に実梅ころがる万福寺　徳島　山本晴美
○雨男の寺に句碑建つ梅雨晴間
玄関に大輪凛と日日草
この海の向かひは紀州浜昼顔　山本瑤子
落雷の音に目覚めし夜明け前
天窓に迷ひ込みたる梅雨の蝶
○海霧深き瀬戸大橋に主塔の灯　小松島　田上幸子
闊歩せる漢の日傘交差点
鮎の香や口の釣針外すとき
祖谷川の早瀬きらりと鮎の影　三好　内田孝子
太陽のやうなトマトを丸かじり
一粒の真珠を胸に夏至の朝
梅雨晴や窓辺に並ぶ猫二匹　細田良子
師の句碑を据ゑし寺苑や夏の蝶
守宮来る網戸に白き腹みせて　福岡　園田清子
本堂へ案内の僧の夏衣
裏山の緑まぶしき墓を買ふ
厄の子に贈る指輪や四葩咲く　鶴田輝代

早朝の枇杷ぽきぽきと収穫す　大野城　美山留唯

料亭の茶庭にゆかし沙羅の花

上棟の安全祈願花卯木　門川　請関ゆかり

洋館の出窓に薔薇の零れ咲く

子の声は天使の響き風薫る

よろめきて触るる青苔やはらかし

細長き日陰にねまる猫二匹

梅雨の雷愛車の下に野良の三毛

花菖蒲阿波岐原（あわきがはら）に出店沸く　国富　山口孝治

※阿波岐原……『古事記』に登場する神話の舞台

八橋の菖蒲指さす父子かな

腰掛けて日傘一つの夫婦かな

青葉風講座に若き声満てり　那覇　稲嶺有晃

聞き役のお喋り長し灯取虫

沖縄忌自決の壕に立ち通す

鎮魂の丘へ海光仏桑花

杖ついて郵便局へ炎天下　高嶺容道

青嵐生きて抗ふことあまた

薄荷飴日月譚　中村千久

ウルルントウハレフウリョク3天高し

子どもの頃はラジオが我が家の娯楽の中心だった。そんな中に、毎日午後4時から流れる「全国気象通報」というものがあった。「この時間は、気象庁発表の今日正午の気象通報をお伝えします。はじめに、各地の天気です。石垣島では……」といった調子で始まり、風向・風力・天気・気圧・気温を、男性アナウンサーが淡々と、実に淡々と読み上げていた。

ときには地図を広げて、聞きなれない地名を探したりする、いささか変な小学生だった。妙なものに夢中になるこの性癖は、60年を経た今も変わらない。

掲句は、『記憶の絵』という連作を作ったときに出来たものを後に作り直したものだ。初案は〈鬱陵島晴れ風力3天高し〉だったが、こんなふうに手を入れてみた。ラジオからの音声という感じを出そうと思ったわけである。

〈大和よりヨモツヒラサカスミレサク　川崎展宏〉に触発された。片仮名を多用したものとしてよく取り上げられるこの句は、戦争末期の昭和20年4月末に沖縄への無謀な海上特攻を敢行して西海に沈んだ戦艦大和、その電信室からの通信兵による打電という体裁をほどこしている。一句にある「ヨモツヒラサカ」はこの世と黄泉の国の境にあるとされる坂のこと。ここにも菫が咲き始めたぞ、という死者の声が切ない。

戦時中には機密扱いになっていた天気予報が報じられるようになったことは、平和な時代を象徴する一つだった。

＊ページ調整のための埋め草として、不定期に掲載します。

北から南から

北国の初夏

北海道　林　陽子

6月、札幌の中心部にある中島公園へ吟行に出かけた。先ず入口で、北海道らしい風物詩と出会う。雪のように真っ白なポプラの綿毛がふわふわと薫風に舞っている。その気ままな様子を見ていると自然と気持ちが和んでくるようだ。

菖蒲池では五、六羽の軽鳧の子がひたすら母親を追う姿に感動、ゆっくりと若葉、青葉のトンネルをくぐり、鳥や春蟬の涼やかな鳴き声に耳を傾ける。

日差しを透かした緑のきらめきは、たとえようもない。甘い香りを漂わせている満開の針槐や、小さな赤実を零し道を染めている桜大樹、春楡、桂、白樺、落葉松、それぞれ花も葉も実も異なった色味なのに、森としてまとまり、しっくりと調和している。多様性がつくる美なのだろう。

西本一都の実感の一句〈万緑やおもへばながき冬ごもり〉暗くて長く寒い季節を耐えたからこそ北国の初夏、6月のうるわしさが心底うれしい。

ここ中島公園は、東京ドーム約5個分に相当する広大な敷地に、北海道初のコンサートホール、北海道立文学館、札幌護國神社、水天宮、天文台、豊平館など多様な施設が点在している。中でもひと際目を引くのが、国の重要文化財に指定されている豊平館である。明治13年に北海道開拓の礎を築いた開拓使によって建築され、現存する木造ホテルとしては我が国最古の建物であるとともに明治、大正、昭和と三代にわたり天皇家が訪れた由緒ある建物である。

アメリカ風建築様式を基調とした木造二階、地下一階建てで、屋根には8基の煙突が取り付けられ、左右対称の美しい立面を持ち、破風飾りには開拓使の建物であることを示す五稜星があしらわれている。白い外壁を鮮やかに縁どる群青色は、昔は宝石として尊ばれたラピスラズリ（瑠璃）から造られていた高貴な色であるという。

この由緒ある豊平館の一室「ぶどうの間」に於いて、札幌北句会主催の中島公園吟行句会が開かれた。

片蔭の鴨々川の水速し　杉山和廣
亀浮上し泳ぐすばやさ薄暑光　紅露恵子
青空に向かふ柳絮の果てしなく　竹重富子
黄菖蒲や鴨々川を彩れり　佐藤麻利子
青梅や幼帝まつる水天宮　岡本　敬子
蔀戸に新緑の影水天宮　中鉢弘一
木洩れ日や一段高き栃の花　島　泰
強面の羅漢の傍に夏落葉　小島良夫
母軽鳧の水脈に子軽鳧の乗り遅れ　林　陽子

万象作品の佳句

江見悦子

二番座の風に吊るせり青バナナ　宜野湾　宜野　顕

沖縄の伝統木造家屋は、一番座、二番座、三番座と部屋が横に並んでいる。一番座は客間、二番座は仏間で、先祖を祀る仏壇を置く神聖で中心的な場所である。風の通り抜ける二番座に吊るされた青バナナは、お参りにやって来た人がお供物として抱えて来たものだろうか。大きな房のバナナに違いない。自然に囲まれた沖縄の暮しののびやかさが窺える。

十薬の花白じろと婚近き　茅ヶ崎　久保田富士子

「十薬」はどくだみのこと。古くから民間薬の原料として利用されて来た。梅雨の頃淡黄色の小さな花をつけ、その下の十字形の苞片の白が際だつ。「婚近き」とあるのは親しい間柄の女性と取りたい。清潔感のある女性のたたずまいと十薬の白との響き合いに、幸福を祈る作者の思いが籠っている。

初生りの名はとろりんと白なすび　那珂川　髙山ひさ子

白なすびは茄子の中でもやわらかいことで知られている。その初生りを手に入れた作者は、「とろりん」という名を面白がっている。さあ、これをどうやって食べようか。こんな俳句も楽しい。3回繰り返される「ナ」音もリズミカルだ。

杏落ちくたれて土に還るかな　ベルリン　森尾　舞

「くたれて」は腐るの意の古語。また方言でもあり、へたるや弱るの意味で使われるようだ。この句の句意は明瞭。オレンジ色に実った杏が枝を離れて落ち、そのまま地面に腐って行き最後は土に還ってゆく。落ちた杏を眼前にして作者は自然の営みのサイクルに思いをいたしている。そのサイクルには勿論我々人間も含まれている。

蟻走るパズルのやうな煉瓦道　柏　村田由美子

煉瓦道を「パズルのやうな」と感じているのは、蟻と一体化して蟻の目になっている作者。パズルはジグソーパズルか。表面が平らではない煉瓦の道を、こぼれ落ち、右往左往し、或いは列を作って動いている蟻の群れの様子が想像される。いつになったらパズルは完成するのだろうか。「パズルのやうな」のたとえが個性的で面白い。

校長の飛入りダンス雲の峰　札幌　佐藤麻利子

中学校の校庭か、フォークダンスの輪に校長が飛入り参加。生徒たちの騒めき、驚き、笑い声も。校長もすっかり乗り気になって真面目に踊っている。ダンスはマイムマイムだろうか、内側に向かって円になり、隣同士で手をつなぎながら時計回りに移動したり、中心に向かって集合したりを繰り返すフォークダンスだ。今の時代には流行らないのかもしれないが、団塊の世代の我々には、懐かしい場面。作者も昔の思い出を句にしたのかもしれない。「雲の峰」が動かない。

一句得て一気に含むソーダ水　新潟　榊原キヨ子

勢いのある楽しい句。リズミカルで心が弾む。「一句」「一気」という調べが効いている。泡立つソーダ水に俳句が成ったあとの爽快感、解放感を詠んでいる。誠に元気で羨ましい。

歯の浮きて六腑に浸むるかき氷　栃木　飯塚キミ

実感のある句。かき氷を口いっぱいに含んだ時の冷たさを「歯の浮きて」と表現。その後「六腑に浸むる」まで、全身で受け止めている夏ならではの冷っこさ。現在は贅沢になって、氷室から切り出した本物の氷を使う店が、若者たちの間で大人気のようだ。シロップはメロンか、苺か。今風のチョコティラミス、などというのもある。

蓮咲きて一天紺を極めけり　千葉　加藤浩子

蓮池と上に広がる空の光景の中で、作者の心を揺さぶったのは「一天紺」と表現した空の鮮やかさなのだろう。中村草田男の句に〈秋の航一大紺円盤の中〉があり、空と海の違いはあるものの「一天紺」の大胆な措辞に驚いた。蓮の花の色は紅か白か、どちらにしても天の紺色との対比が明らか。簡潔で力の漲った佳句である。

鷹ヶ峰露天風呂より梅雨の月　東京　長谷川はるみ

舞台である「鷹ヶ峰」（鷹峰とも）は、江戸初期の文化人本阿弥光悦が芸術村を築いた場所。京都の町衆出身の光悦は、書、陶芸、漆芸、茶の湯など多くの分野で優れた作品を残した。今でも、山に囲まれた閑静な街並みが残っている。とすると、この場所で仰ぐ梅雨の月はただものではない。昔から芸術家たちも愛したであろう梅雨の月を、しかも露天風呂から眺めている贅沢。この句の場合「鷹ヶ峰」の固有名詞が外せない。格調のある句に仕上がった。

長雨や切つ先重き青芒　横浜　岡　元枝

まるで刃物に切られたように見える青芒の鋭い葉先が、長雨の雫を含んで重そうに垂れている。長雨に倦んだ心に青芒の有り様が新鮮に映る。「切つ先」という言葉に作者の感性が光り、すっきりとした写生句となった。

客を待つ夏座蒲団の浅葱色　静岡　大木政子

上五の「待つ」はタ行四段活用の動詞、終止形と取ればここで切れて主語は作者となる。連体形と取れば夏座蒲団にかかり、擬人法の句となるが、ここでは切れを大切にして前者と取りたい。夏座蒲団の素材は麻、夏ならではのさっぱりとした触感が心地よい。浅葱色は薄い藍色、水色のこと。来客のために新調した夏座蒲団なのだろう。客間に並べて客を迎える支度がすっかり整ったという作者の満足感に共感した。

提灯に亡き人の名や村祭　静岡　永島美佐子

村祭の夜、鎮守の社には提灯が何段にも掲げられている。灯された提灯には、芳志を捧げた氏子の名前が大きくはっきりと読める。その中に亡くなった人の名前があった。寄って来た人達と、亡くなった人の話をひとしきり。笛や太鼓の音が神楽の始まりを告げている。先祖代々続いている共同体である村祭の夜が想像できる。

海霧深き瀬戸大橋に主塔の灯　小松島　田上幸子

瀬戸内海をまたぎ本州と四国を結ぶ六つの大橋の総称が瀬戸大橋、それぞれの主塔は最高２００m近い高さである。季語は「海霧」、一面霧に隠された空、海、島の中に主塔の灯が明るい。自然と人工が一つになった美しさがある。

ルビーの小函（10月号）

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

（編集部・校正担当）

7　**木斛の花（もっこくのはな）**
23　**修二会（しゅにえ）**
27　一葦（いちい）
44　**虎杖の花（いたどりのはな）**
45　鍬絵（こてえ）
　　要（やや）
46　和毛（にこげ）
　　水馬（あめんぼう）
47　石灰（あく）
48　**野萱草（のかんぞう）**
　　天牛（かみきり）
　　殿（しんがり）
　　礎（いしじ）
51　梢（うれ）
52　**酸漿（ほおずき）**
　　首（こうべ）
　　曲輪（くるわ）
　　艫綱（ともづな）
54　**花魁草（おいらんそう）**
　　落人（おちうど）
55　確と（しかと）
　　鋭声（とごえ）
　　縁端（えんばな）
　　凰蝶（あげはちょう）
56　鈍色（にびいろ）
57　**鮴（ごり）**
　　撒水（てっすい）
59　化粧ふ（けわう）
　　戦ぎ（そよぎ）
　　蛻（ぬけがら）
　　水瓶（すいびょう）
60　**紙魚（しみ）**
　　老鶯（おいうぐいす）
61　**鳧（けり）**
　　栄螺（さざえ）
62　**杜鵑（ほととぎす）**
　　人集り（ひとだかり）
　　分蘖（ぶんけつ）
　　掩体壕（えんたいごう）
　　歪（いびつ）
　　磐座（いわくら）
68　屯（たむろ）
69　**神立（かみたち）**
　　天安河原（あまのやすかわら）
　　葛折（つづらおり）
　　劈く（つんざく）
　　奉仕どん（ほじゃどん）
78　**河骨（こうほね）**
　　益荒男（ますらお）
81　**四葩（よひら）**
　　蔓延る（はびこる）
　　其処彼処（そこかしこ）
　　鰭背（いなせ）
　　麝の花（もちのはな）
82　**青条揚羽（あおすじあげは）**
　　青葉木菟（あおばずく）
　　射干（ひおうぎ）
83　**新馬鈴薯（しんじゃが）**
　　孑子（ぼうふら）
　　澱（よどみ）
85　案内（あない）

万象年譜

大木　茂編

	vol.234 令和３年９月号	vol.235 令和３年10月号
俳句作品	主宰作品　ほととぎす　内海良太 副主宰作品　花さびた　小林愛子 同人特別作品　通し鴨　佐藤和子 ダム湖の四季　長島　操	主宰作品　若鮎　内海良太 副主宰作品　朝な夕な　小林愛子 二十周年祝句 河原地英武　田島和生　柏原眠雨 蓑目良雨　辻　恵美子　中川雅雪 宮田正和 二十周年記念作品 江見悦子　柳澤宗正　山田春生 福島せいぎ　内藤恵子 同人特別作品　呆け封じ　山口千代子 佃　島　久保村淑子
評論・随筆・鑑賞・その他	続・万象と共に㊼　人生如斯ものかと観じ候　内海良太 句集鑑賞　飛高隆夫『川あかり』……喜多尾明子 大林彬彦 同人アンケートのまとめ……編集部 俳句カレンダー掲載句自註……中村千久 令和４年版俳人協会編「俳句カレンダー」ご案内 俳書探訪……曽根　満 万象ノオト「犬」 「万象俳句会」会計担当を終えて……竹澤竹里 珈琲ぶれいく⑯ 会員作品投句先変更（八月号掲載済み）藤原千代子から成瀬真紀子へ（九月十五日締切より）	続・万象と共に㊽ 「万象」創刊二十周年と三代目……内海良太 「万象」創刊二十周年を迎えて……内海良太 「万象」アルバム 創刊二十周年記念講演 明治の洋画家　浅井忠のこと……内海良太 「万象」十五周年記念　第十九回万象俳句賞発表 茶摘笠　藤原千代子 佳　作　大内マキ子　林　陽子 特別賞　佐藤雄二　今越みち子　佐藤　哲 選　評　得点表　審査経過……内海良太ほか 創刊二十周年記念特集 私の一句「万象」全同人アンケート
行事・記事	巻頭　桑原優美子（東京）	巻頭　高野松風（新潟）

	vol.236 令和3年11月号	vol.237 令和3年12月号
	主宰作品　遮光器土偶　内海良太 副主宰作品　小鳥　小林愛子 同人特別作品　足尾銅山　大木　茂 県道ふじさん　小川明美	主宰作品　蓮根掘る　内海良太 副主宰作品　雁渡し　小林愛子 同人特別作品　鳥渡る　山本とく江 涼新た　森山暁湖
俳句手帳の掲載句 ①掲載句自註 ②俳句と私 創刊二十周年記念　北から南から 同人作品投句先変更　内海保子から榎本文代へ（十一月二十五日締切より） 俳書探訪……古川京子 万象ノオト「俳句と私」 中山純子記念句会……河野尚子 「万象」略年譜（平成二十八・九～令和三・八）　大木　茂編 珈琲ぶれいく⑰	続・万象と共に⑲ 惜別・谷田部栄さん―黒羽のニンフ逝く―　内海良太 新同人への祝辞と激励……内海良太 俳書探訪……曽根　満 万象ノオト「手紙」 同人会だより　第四回中山純子記念俳句賞作品募集 「万象」創刊二十周年記念事業報告 珈琲ぶれいく⑱	続・万象と共に⑳ 「花鳥来」主宰深見けん二先生を偲ぶ…内海良太 新しい「万象」を目指して 来年度からの人事変更について……内海良太 俳句カレンダー掲載句自註……山本とく江 俳書探訪……古川京子 万象ノオト「手帳」 同人会だより 第四回中山純子記念俳句賞作品募集…同人会 珈琲ぶれいく⑲
	巻頭　宮田千恵子（福岡） 新同人発表 小板橋泰山　中川雅月　北浦詩子 本多ひとみ　桑原優美子　高野松風 木内マヤ　松浦陵保 出版　中村千久第一句集『薄荷飴』 佐藤雄二氏 十一月二十六日逝去（九十四歳）	巻頭　小板橋泰山（横浜） 石田野武男氏 十二月二十日逝去（九十一歳）

	vol.238 令和4年1月号	vol.239 令和4年2月号	vol.240 令和4年3月号
	主宰作品　白鳥　内海良太 副主宰作品　露　小林愛子 新春特別作品　慶喜さん　藤原千代子 同人特別作品　大荒行　内田郁代 秋は徐に　大内和憲	主宰作品　二の酉　内海良太 副主宰作品　枯れ　小林愛子 同人特別作品　五箇山　成瀬真紀子 基地隣　比嘉半升	主宰作品　初霞　内海良太 副主宰作品　冬桜　小林愛子 同人特別作品　吉見の里　増田幸子 小春　穂苅照子
「万象」この一年……大木　茂 「万象」句会一覧	続・万象と共に61　栗のはなし二題　―搗栗飾る―……内海良太 俳書探訪　……曽根　滿 万象ノオト「森」 同人会便り　同人会の今後について……柳澤宗正 同人会名簿についてのお願い　同人会事務局 珈琲ぶれいく20	続・万象と共に62『更級日記』と上総国……内海良太 「万象」二十周年記念評論賞　発表 記念評論賞　飛高隆夫の俳句表現……池田やすし 次点　芭蕉と島田……曽根　滿 選考結果表・審査感想・審査経過 『含羞の抒情―飛高隆夫の俳句宇宙』を読んで ……岡本敬子　入山繁幸 俳書探訪　……古川京子 万象ノオト「はさみ」 同人会便り 第十七回「万象」同人会総会の予告……同人会 珈琲ぶれいく21	続・万象と共に63高遠からの中村不折……内海良太 「万象」二十周年記念評論賞　次点作品……曽根　滿 芭蕉と島田 句集鑑賞　たましずめの俳句『薄荷飴』中村千久 ……山口素基 俳書探訪（最終回）……曽根　滿 万象ノオト「得意料理」 同人会便り　同人会の新役員……同人会 中山純子記念俳句賞の選者、同人名簿
	巻頭　太田佳美（江別）	巻頭　三木豊子（横浜） 出版 山口素基自註句集『山口素基の三百句』	
		山口千代子さん 二月二十七日逝去（八十八歳）	巻頭　喜多恭仁子（千葉）
			岸川素粒子氏 三月二十二日逝去（九十六歳）

	vol.241 令和４年４月号	vol.242 令和４年５月号	vol.243 令和４年６月号
	名誉主宰作品　芽　ぶ　き　内海良太 主宰作品　春の鴨　江見悦子 同人特別作品　仏生会　曽根　滴 　　阿佐谷　加賀葉子 新同人競詠作品 小板橋泰山　中川雅月　北浦詩子 本多ひとみ　桑原優美子　髙野松風 木内マヤ　松浦陵保	名誉主宰作品　初　蝶　内海良太 主宰作品　春の閨　江見悦子 同人特別作品　遺髪塚　松原智津子 　　曽良忌　倉谷紫龍	名誉主宰作品　山ざくら　内海良太 主宰作品　若　緑　江見悦子 同人特別作品　約　束　前田貫美子 　　沼の春　岩﨑武士
珈琲ぶれいく㉒ 「万象」組織と業務分担	万象の窓①　大任を引き受けて　……　江見悦子 風のしをり①　俳句の基本　沢木欣一　……　江見悦子 【含羞の抒情】鑑賞 【俳句界】１月号「この本この一句」より転載 古典と遊ぼう①【梁塵秘抄】と今様　……　内海良太 万象ノオト「花束」 同人会便り　……　柳澤宗正 珈琲ぶれいく㉓ 顧問退任のお知らせ 令和四年四月三十日をもって、原田しずえ先生・内藤恵子先生 「万象」新誌面について　……　編集部 新年度より、中央句会・同人句会は、「万象・新中央句会」として一本化。会場：東京文化会館　日時：毎月第四土曜日午後一時～	万象の窓②　初心の頃　……　江見悦子 風のしをり②　定型と季語　沢木欣一　……　江見悦子 同人会だより　ごあいさつ　……　曽根　滴 万象ノオト「ポケット」 俳句カレンダー掲載句鑑賞（三澤治子）：久保田宮士子 珈琲ぶれいく㉔ 句会一覧	万象の窓③「与謝野晶子『白桜忌』によせて」江見悦子 第四回中山純子記念俳句賞発表　万象俳句会・万象同人会 正賞　牛角力　豊田高子 佳作　お四国の路　村上和義 特別賞　よろずよ橋　髙橋ひろ 選評・順位表　応募者一覧
巻頭　三村紀子（東京）	巻頭　岡田あゆみ（小松島）	巻頭　宮田千恵子（福岡）	

vol.246	vol.245	vol.244	
令和4年9月号	令和4年8月号	令和4年7月号	
名誉主宰作品　那　須　内海良太 主宰作品　アカンサス　江見悦子	名誉主宰作品　叉　蘇　内海良太 主宰作品　夕立晴　江見悦子 同人特別作品　私の俳句　岸川素粒子 茅花流し　阿部　澄 新人賞受賞作品　編集部抄出	名誉主宰作品　雪加とぶ　内海良太 主宰作品　牛蛙　江見悦子 同人特別作品　花は葉に　榎本文代 徳島城址　村上和義 同人会総会句会　内海名誉主宰選ほか	同人会だより　「万象」同人会総会、無事終了 風のしをり③　感動　沢木欣一……江見悦子 古典と遊ぼう②「粱塵秘抄」と遊女……内海良太 万象ノオト「弁当箱」 俳句カレンダー掲載句自註……佐藤　哲 珈琲ぶれいく㉕
万象の窓⑤「ひまわり」の話Ⅰ……江見悦子 風音散歩②……小林愛子 同人会だより　「幹事会報告」……大久保　進 第二十回「万象」新人賞発表　三村紀子…万象俳句会 選考経過　選考の感想……内海良太ほか 風のしをり⑤　心を開く　沢木欣一……江見悦子 「沖縄の俳句」月刊「俳句界」2022年5月号より転載 ……前田貴美子 古典と遊ぼう③「粱塵秘抄」補遺 ―後白河院のこと―……内海良太 万象ノオト「食卓」 珈琲ぶれいく㉗	万象の窓④「与謝野晶子　余話」……江見悦子 風音散歩①……小林愛子 同人会だより　「会員増と句会の充実」…沢辺たけし 第十七回同人総会記……北浦詩子 風のしをり④　一点主義　沢木欣一……江見悦子 俳句カレンダー掲載句鑑賞（佐藤雄二）…高野松風 万葉の抒情①「万葉集」にたずねる抒情の源流①　橋本　清 万象ノオト「リサイクル」 （編集部から）投球技術と俳句のこと……中村千久 珈琲ぶれいく㉖	巻頭　道場啓子（金沢） 令和4年度「万象」同人会総会　3年ぶり 四月十五日（金）　東京・学士会館 参加者五十一名	
万象の窓⑥「ひまわり」の話Ⅱ……江見悦子 風音散歩③……小林愛子	巻頭　高山晋英（札幌）	巻頭　臼村喜久代（金沢）	中條今日子さん 七月二十三日逝去（九十六歳）
			山田春生顧問 八月二十七日逝去（九十歳）

	vol.247 令和4年10月号	vol.248 令和4年11月号
同人特別作品　暑に耐ふる　神田美穂子 脳十忌　山本右近	名誉主宰作品　天の川　内海良太 主宰作品　水中花　江見悦子 同人特別作品　マリア観音　三屋英俊 いわし雲　砂地宏子 万象俳句賞応募作品抄　江見悦子選	名誉主宰作品　青柿　内海良太 主宰作品　草の露　江見悦子 同人特別作品　成田祇園祭　奥太雅 虹二重　加山ひさ子
同人会だより　「万象」オンライン同人句会の参加者募集 …… 沢辺たけし 俳句カレンダー掲載句自註 …… 呉屋菜々 令和5年版　俳人協会編「俳句カレンダー」案内 風のしをり⑥ 集中と持続　沢木欣一 …… 江見悦子 万葉の抒情② 「万葉集」にたずねる抒情の源流② 橋本　清 「「万象」創刊二十周年」紹介記事（「俳句四季」2022年6月号より転載） 万象ノオト「雨」 珈琲ぶれいく㉘	万象の窓⑦ とうきょう総文2022 …… 江見悦子 風音散歩④ …… 小林愛子 同人会だより　「万象」オンライン同人句会の参加者募集 …… 沢辺たけし 第二十回万象俳句賞発表 万象俳句賞　水の音　林　陽子 次点　水芭蕉　小板橋泰山 佳作　麦刈り　曽根　潤 佳作　旅心　成瀬真紀子 特別賞　つれづれ　今越みち子 選評　得点表　審査経過 …… 江見悦子ほか 風のしをり⑦ おおばこの花　細見綾子 … 江見悦子 古典と遊ぼう④ 和泉式部のこと …… 内海良太 万象ノオト「カレーライス」 珈琲ぶれいく㉙	万象の窓⑧ 富士山あれこれI …… 江見悦子 風音散歩⑤ …… 小林愛子 新同人の皆さんへ …… 主宰　江見悦子 同人会だより　第五回「中山純子記念俳句賞」作品募集 …… 沢辺たけし 俳句カレンダー掲載句鑑賞（石田野武男） 倉谷ます美
	巻頭　小池清晴（東京）	巻頭　宮田千恵子（福岡） 新同人発表 太田佳美　三木豊子　喜多恭仁子 三村紀子　岡田あゆみ　道場啓子 小池清晴

	vol.249	vol.250	vol.251
	令和４年12月号	令和５年１月号	令和５年２月号
	名誉主宰作品　白　萩　内海良太 主宰作品　今年米　江見悦子 同人特別作品　除夜の鐘　久留島規子 山茶花　小板橋泰山	名誉主宰作品　雁のころ　内海良太 主宰作品　冬紅葉　江見悦子 新春特別作品　雁渡し　林陽子 同人特別作品　鑑真展　内海保子 駿府城　大長文昭	名誉主宰作品　初筑波　内海良太 主宰作品　筑波颪　江見悦子 同人特別作品　雪のひねもす　阿久津勝利 風の唄　石川純子
	風のしをり⑧雪の日に　細見綾子……江見悦子 万葉の抒情③「万葉集」にたずねる抒情の源流③　橋本　清 万象ノオト「路地」 珈琲ぶれいく㉚ 令和四年「万象」全国俳句大会作品集	万象の窓⑨富士山あれこれⅡ……江見悦子 風音散歩⑥……小林愛子 同人会だより　第五回「中山純子記念俳句賞」作品募集 ……沢辺たけし 「春嶺」２０２２年８月号より転載 風のしをり⑨併　細見綾子……江見悦子 「扉」２０２２年９月号より転載 古典と遊ぼう⑤和泉式部のこと　其の弐…内海良太 万象ノオト「手」 珈琲ぶれいく㉛ 万象この一年……大木　茂 「万象」句会一覧	万象の窓⑪ＡＩ一茶くん①……江見悦子 風音散歩⑧……小林愛子 同人会だより　同人会名簿についてのお願い　大久保　進
	巻頭　杉澤　修（静岡） 出版　江見悦子主宰第二句集「砂時計」	巻頭　店網洋子（佐野）	巻頭　杉澤　修（静岡） 出版　小金原俳句教室四十五周年記念 合同句集「小金原　第五句集」

	vol.252 令和５年３月号	vol.253 令和５年４月号
山田春生自選四十四句　編集部	名誉主宰作品　初　景　色　内海良太 主宰作品　初芝居　江見悦子 同人特別作品　大白鳥来る日　林　陽子 煤　逃　げ　大久保　進	名誉主宰作品　春立つ日　内海良太 主宰作品　梅　白　し　江見悦子 同人特別作品　花咲く島　大濱宗弘 秩父三峯神社　南雲秀子 新同人競詠作品 太田佳美　三木豊子　喜多恭仁子 三村紀子　岡田あゆみ　道場啓子 小池清晴
山田春生先生を悼む　内海良太　江見悦子　小林愛子 内藤恵子　山本とく江　南雲秀子 風のしをり⑪くれなゐの色を見てゐる寒さかな　江見悦子 古典と遊ぼう⑥和泉式部のこと　其の参…　内海良太 万象ノオト「卵焼き」 珈琲ぶれいく㉝	万象の窓⑫ＡＩ一茶くん②……江見悦子 風音散歩⑨……小林愛子 同人会だより　「万象」オンライン同人句会の参加者募集 ……同人会 江見悦子主宰第二句集「砂時計」鑑賞 句集「砂時計」を読む……内海良太　成瀬真紀子 風のしをり⑫早春　その１　細見綾子……江見悦子 万葉の抒情⑤「万葉集」にたずねる抒情の源流⑤　橋本　清 俳句カレンダー掲載句自註……中村千久 万象ノオト「城下町」 珈琲ぶれいく㉞ お知らせ　４月号から　同人作品選者　主宰　江見悦子 万象作品選者　主宰　江見悦子 名誉主宰　内海良太	万象の窓⑬新年の集い……江見悦子 風音散歩⑩……小林愛子 同人会だより　同人会の現状と課題……曽根　満 江見主宰インタビュー 「万象」俳句の新しみについて……編集部 風のしをり⑬早春　その２　細見綾子……江見悦子 古典と遊ぼう⑦和泉式部のこと（補遺）…内海良太 万象ノオト「宝物」 珈琲ぶれいく㉟
巻頭　中村　優（敦賀） 出版　谷渡粋（末枝）句集『微風』		巻頭　高山晢英（札幌）

vol.254
令和５年５月号

名誉主宰作品　雛飾る　内海良太
主宰作品　菜の花蝶に　江見悦子
同人特別作品　米寿　片桐帆一
辺戸崖端　中本清

万象の窓⑭　本郷の大楠　……江見悦子
風音散歩⑪　……小林愛子
同人会だより　会員募集の一方法　……曽根満
福島せいぎ句集「火球」鑑賞　……沢辺たけし
吉中愛子　杈本文代　神田美穂子
前田貴美子　村上和義　木内マヤ
風のしをり⑭　桐の花　細見綾子　……江見悦子
万葉の抒情⑥「万葉集」にたずねる抒情の源流⑥　橋本清
俳句カレンダー掲載句自註　……小林愛子
万象ノオト「映画」
珈琲ぶれいく㊱
「万象」句会一覧
「万象」組織と業務分担（令和五年四月号から）

巻頭　中村優（敦賀）

vol.255
令和５年６月号

名誉主宰作品　松の花　内海良太
主宰作品　春落葉　江見悦子
同人特別作品　暖か　古川京子
桜　宮﨑知恵美

万象の窓⑮　島守忌　……江見悦子
風音散歩⑫　……小林愛子
同人会だより　「万象」オンライン同人会の参加者募集
……同人会
第五回中山純子記念俳句賞発表　万象俳句会・万象同人会
正賞　明けの春　成瀬真紀子
佳作　慰霊の旅　村上和義
佳作　雪の声　喜多尾明子
特別賞　土親し　高橋ひろ
選評・順位表　応募者一覧
風のしをり⑮　青梅　細見綾子　……江見悦子
古典と遊ぼう⑧　新みハ俳諧の花也　……内海良太
主宰インタビューを読んで…　中鉢弘一
三屋英俊　大久保進　荻野加蒋子
中條睦子　入山繁幸　大湾宗弘
追想の山法師（「俳句四季」3月号より）…江見悦子
万象ノオト「包丁」
珈琲ぶれいく㊲

巻頭　山下敦子（西海）

vol.256	vol.257	vol.258
令和５年７月号	令和５年８月号	令和５年９月号
名誉主宰作品　朧　夜　内海良太	名誉主宰作品　蟻　の　列　内海良太	名誉主宰作品　走　馬　灯　内海良太
主宰作品　アマリリス　江見悦子	主宰作品　青　葉　闇　江見悦子	主宰作品　サングラス　江見悦子
同人特別作品　木の芽風　高田たみ子	同人特別作品　春惜しむ　沢辺たけし	同人特別作品　燥々むすび　新妻奎子
ミント摘む　芝宮留美子	浮　月　楼　石川裕子	ソーダ水　澤　照枝
新人賞受賞作品　編集部抄出		
万象の窓⑯　花菖蒲　……　江見悦子	万象の窓⑰　牧野富太郎　草を褥に　……　江見悦子	万象の窓⑱　牧野富太郎②　花と恋して　……　江見悦子
風音散歩⑬　……　小林愛子	風音散歩⑭　……　小林愛子	風音散歩⑮　……　小林愛子
同人会だより　幹事会報告　……　大久保　進	同人会だより　私たちの師系①　……　曽根　満	同人会だより　私たちの師系②　……　曽根　満
風のしをり⑮　時鳥　細見綾子　……　江見悦子	第二十一回「万象」新人賞発表　杉澤　修	風のしをり⑱　萩（承前）　細見綾子　……　江見悦子
万葉の抒情⑦「万葉集」にたずねる抒情の源流⑦　橋本　清	選考経過　選考の感想　……　万象俳句会	万葉の抒情⑧「万葉集」にたずねる抒情の源流⑧　橋本　清
（編集部から）語学学習と俳句のこと　……　中村千久	俳句カレンダー掲載句自註　……　江見悦子ほか	「この本この一句」
「句集を読む」江見悦子句集「砂時計」	風のしをり⑰　萩　細見綾子　……　内海良太	（「俳句界」五月号掲載記事より転載）
（「春嶺」５月号より転載）　……　片桐幹男	古典と遊ぼう⑨「去来抄」より二つ　……　江見悦子	万象ノオト「段ボール」
万象ノオト「天気」	受贈誌展望（「波」五月号より）　……　内海良太	珈琲ぶれいく㊵
珈琲ぶれいく㊳	万象ノオト「耳」	
	珈琲ぶれいく㊴	
巻頭　宮田千恵子（福岡）	巻頭　大月玲子（千葉）	
	巻頭　山下敦子（西海）	
	出版　中村千久「俳句と遊ぼう」	
	広瀬俊雄　句集と紀行文「ナマステ」	
	佐藤嘉洋氏	
	九月十八日逝去（八十一歳）	

vol.261	vol.260	vol.259
令和5年12月号	令和5年11月号	令和5年10月号
名誉主宰作品　秋　高　し　内海良太 主宰作品ごめ帰る　江見悦子	名誉主宰作品　望　の　月　内海良太 主宰作品草の花　江見悦子 同人特別作品　クジラの町　疋田華子 遊行の小砂持　倉谷ます美	名誉主宰作品　麦　茶　内海良太 主宰作品夜の秋　江見悦子 同人特別作品　上州栄螺堂　加藤季代 流　螢　松井佐枝子 万象俳句賞応募作品抄　江見悦子選
万象の窓⑲「流行」と「不易」……江見悦子 風音散歩⑯……小林愛子 同人会だより　私たちの師系③……曽根　満 第二十一回万象俳句賞発表 万象俳句賞　緑　さ　す　小板橋泰山 次　点　海　峡　大内マキ子 佳　作　子規庵にて　村田由美子 特別賞　パタゴニア　広瀬俊雄 選評　得点表　審査経過……江見悦子ほか 江見悦子自選句鑑賞①……小林愛子　松原智津子 風のしをり⑲　紅葉　細見綾子……江見悦子 古典と遊ぼう⑩　菅原孝標女の伯母は「蜻蛉日記」の作者 ……内海良太 「涼太の秀句巡礼」（俳誌「少年」より転載）　坂西涼太 万象ノオト「電柱」 珈琲ぶれいく㊶	万象の窓⑳　欣一忌に考える……江見悦子 風音散歩⑰……小林愛子 同人会だより　第六回「中山純子記念俳句賞」作品募集 ……沢辺たけし 江見悦子自選句鑑賞②……藤原千代子　中村千久 風のしをり⑳　紅葉（承前）　細見綾子……江見悦子 万葉の抒情⑨「万葉集」にたずねる抒情の源流⑨ 俳句カレンダー掲載句自註　橋本　清 「俳句と遊ぼう」で遊ぼう……江見悦子 万象ノオト「カーテン」 珈琲ぶれいく㊷ 令和五年「万象」全国俳句大会作品集 万象の窓㉑「即境」の三つの要素……江見悦子 風音散歩⑱……小林愛子	巻頭　高山晢英（札幌）
	巻頭　谷　廣司（札幌）	巻頭　宮田千恵子（福岡） 新同人発表 杉澤　修　店網洋子　中村　優 山下敦子　大月玲子 鍋島広子さん 十一月五日逝去（八十八歳） 比嘉半升氏 十一月九日逝去（八十一歳）

	vol.262 令和6年1月号	vol.263 令和6年2月号
同人特別作品　冬の虹　三好かほる 沖縄に思ふ　恒川清爾	名誉主宰作品　初明り　内海良太 主宰作品　能登しぐれ　江見悦子 新春特別作品　木曾の秋　小板橋泰山 同人特別作品　小春の里　谷渡末枝 五湖の里　髙田勝子	名誉主宰作品　雁の列　内海良太 主宰作品　水仙花　江見悦子 同人特別作品　佐倉　赤堀洋子 整備士の初便　松浦陵保
同人会だより　第六回「中山純子記念俳句賞」作品募集 …… 沢辺たけし 江見悦子自選句鑑賞③ …… 広瀬俊雄　鈴木波江 句集鑑賞　谷渡　粋句集『微風』鑑賞 能登の女性の息遣い …… 岡本敬子 風のしをり㉑「続・風のしをり」について …… 江見悦子 古典と遊ぼう⑪料紙の話 …… 内海良太 万象ノオト「新聞」 珈琲ぶれいく㊸ 「万象」句会一覧 万象この一年 …… 大木　茂	万象の窓㉒　デトロイトを訪ねて …… 江見悦子 風音散歩⑲ …… 小林愛子 「わたしの歳時記　草の露」 （「俳句四季」より転載記事） …… 江見悦子 同人会だより　令和6年を迎えて …… 曽根　満 令和5年度「万象」同人会総会・全国俳句大会　報告 …… 砂地宏子 江見悦子自選句鑑賞④ …… 福島せいぎ　山本右近 続・風のしをり①子規俳句の魅力 ―初期の作品から（一）　沢木欣一 …… 編集部 万葉の抒情⑩「万葉集」にたずねる抒情の源流⑩　橋本　清 万象ノオト「万年筆」 珈琲ぶれいく㊹	万象の窓㉓　金沢から能登へ …… 江見悦子 風音散歩⑳ …… 小林愛子 「江見悦子句集『砂時計』を詠む」 （俳誌『初桜』令和五年秋第七号より転載） 同人会だより　同人会名簿についてのお願い　大久保　進 江見悦子自選句鑑賞⑤ …… 倉谷紫龍　林　陽子 続・風のしをり②子規俳句の魅力 ―初期の作品から（二）　沢木欣一 …… 編集部
巻頭　一由久美子（東京） 令和5年度「万象」同人総会・全国大会 令和元年以来4年ぶり 十月二十三日（月） 東京・ホテルグランドヒル市ヶ谷 参加者九十三名	三澤治子さん　一月六日逝去（百歳）	巻頭　宮田千恵子（福岡）

vol.266	vol.265	vol.264	
令和6年5月号	令和6年4月号	令和6年3月号	
名誉主宰作品　花ミモザ　内海良太 主宰作品　花ゆすら　江見悦子	名誉主宰作品　寒明くる　内海良太 主宰作品　雛飾る　江見悦子 同人特別作品　末黒野　豊田高子 春の社寺　喜多尾明子 新同人競詠作品 杉澤　修　店網洋子　中村　優 山下敦子　大月玲子	名誉主宰作品　薄氷　内海良太 主宰作品　スニーカー　江見悦子 同人特別作品　肥前十一月　田中道江 平和観音　島田和枝	
万象の窓㉖ 絢子先生と牡丹① ……江見悦子 俳句カレンダー掲載句自註 ……江見悦子 同人会だより　同人会の活動について……柳澤宗正	万象の窓㉕ 能登半島地震の句 ……江見悦子 風音散歩 ……休揚 俳句カレンダー掲載句自註 ……曽根　満 同人会だより　私のお宝 ……福島せいぎ 江見悦子自選句鑑賞⑦ ……大木　茂 続・風のしをり④ 子規俳句の魅力 ―初期の作品から(四)　沢木欣一 ……編集部 古典と遊ぼう⑬「紫式部日記」 ……内海良太 「季節風」新年俳句大会報告 ……大村峰子 万象ノオト「うどん」 珈琲ぶれいく㊼	古典と遊ぼう⑫「小右記」拾い読み ……内海良太 万象ノオト「跳び箱」 珈琲ぶれいく㊺ 「万象」誌の配送について ……万象俳句会 万象の窓㉔ 「万象賞」に応募を ……江見悦子 風音散歩㉑ ……小林愛子 「砂時計」鑑賞　俳誌「森」(令和五年十月号より転載) 同人会だより　「万象」オンライン同人句会の参加者募集 ……沢辺たけし 江見悦子自選句鑑賞⑥ ……前田貴美子 続・風のしをり③ 子規俳句の魅力 ―初期の作品から(三)　沢木欣一 ……編集部 万葉の抒情⑪「万葉集」にたずねる抒情の源流⑪　橋本　清 万象ノオト「鍵」 珈琲ぶれいく㊻ 「万象」誌の配送について ……万象俳句会	
	巻頭　星野信子(横浜)	小板橋泰山氏 三月三十日逝去(七〇歳) 巻頭　為永希月枝(敦賀)	
巻頭　星野信子(横浜) 出版　倉谷紫龍第一句集「群青の湖」	岩崎武士氏 四月十六日逝去(八十一歳)		

	同人特別作品　さっぽろ雪まつり　佐藤　哲 島根の秋　河野尚子	
	受贈俳誌紹介　俳誌「曙」（令和6年2月号より転載） 福島せいざ句集「箱廻し」鑑賞 …… 江見悦子　内海良太　小林愛子 …… 中村千久　柳澤宗正　曽根　満　榎本文代 続・風のしをり⑤ 子規の俳句鑑賞（一）林　徹　編集部 江見悦子自選句鑑賞⑧ …… 榎本文代　谷渡末枝 万葉の抒情⑫「万葉集」にたずねる抒情の源流⑫ 橋本　清 万象ノオト「神社」 珈琲ぶれいく㊽ 「万象」句会一覧	
名誉主宰作品　春　灯　内海良太 主宰作品　花　靄　江見悦子 同人特別作品　菜種梅雨　大内佐奈枝 春のアメリカ東岸　鈴木波江 第六回中山純子記念俳句賞作品	万象の窓㉗ 絢子先生と牡丹② …… 江見悦子 同人会だより　札幌句会発足とその歩み … 松原智津子 続・風のしをり⑥ 子規の俳句鑑賞（二）林　徹　編集部 第六回中山純子記念俳句賞発表　万象俳句会・万象同人会 正賞　藍の郷　村上和義 正賞　初山河　谷渡末枝 佳作・特別賞　古事　高橋ひろ 特別賞　木星　今越みち子 選評・順位表　応募者一覧 江見悦子自選句鑑賞⑨ …… 沢辺たけし　大湾宗弘 古典と遊ぼう⑭「紫式部日記」その2―モノノケ調伏― …… 内海良太 万象ノオト「蕎麦」 珈琲ぶれいく㊾ 「万象」組織と業務分担（令和6年4月号から）	巻頭　宮田千恵子（福岡）
名誉主宰作品　田水引く　内海良太 主宰作品　葉桜の風　江見悦子 同人特別作品　鷹　西本才子 桜　人　砂地宏子	万象の窓㉘ 荘川桜 …… 江見悦子 同人会だより　幹事会報告 …… 大久保　進 続・風のしをり⑦ 子規の俳句鑑賞（三）林　徹　編集部 万葉の抒情⑬「万葉集」にたずねる抒情の源流⑬ 橋本　清 江見悦子自選句鑑賞⑩ …… 柳澤宗正　岡本敬子 万象ノオト「動物園」	巻頭　一由久美子（東京）

	vol.269 令和6年8月号	vol.270 令和6年9月号	vol.271 令和6年10月号
	名誉主宰作品　夏の霧　内海良太 主宰作品　青梅雨　江見悦子 同人特別作品　茶摘　大村峰子 夏雲　中嶋久登 新人賞受賞作品　江見悦子選	名誉主宰作品　滴り　内海良太 主宰作品　さくらんぼ　江見悦子 同人特別作品　器粟の花　福島吉美 竹の秋　塗木翠雲	名誉主宰作品　青蔭　内海良太 主宰作品　小楢の風　江見悦子 同人特別作品　葛ざくら　岡本敬子 卵時雨　丸本祥夫
珈琲ぶれいく㊿ 俳句カレンダー掲載句自註　……中村千久	万象の窓㉙高木蒹葭堂のこと　……江見悦子 同人会だより　こぶし窓の思い出　……亀田やす子 続・風のしをり⑧子規の俳句鑑賞(四)　林徹　編集部 古典と遊ぼう⑮「紫式部日記」その3―色いろいろ― ……内海良太 江見悦子自選句鑑賞⑪　……曽根　満 第二十二回「万象」新人賞発表　一由久美子 選考経過　選考の感想　……中條睦子 第十七回「万象」千葉県支部俳句大会報告　万象俳句会 「人間コンピューター」(俳誌「百花」より転載) ……江見悦子ほか 万象ノオト「パン」　……多田英治 珈琲ぶれいく㊿	万象の窓㉚森　鷗外のこと　……江見悦子 風音散歩㉒　……小林愛子 同人会だより　食べて学んだ風木舎　……吉中愛子 続・風のしをり⑨子規の俳句鑑賞(五)　林徹　編集部 万葉の抒情⑭「万葉集」にたずねる抒情の源流⑭　橋本　清 江見悦子自選句鑑賞⑫　……井村和子 季節風「片栗の花吟行」　……藤原千代子 富士山山開き吟行　……神田美穂子 万象ノオト「橋」 珈琲ぶれいく㊿	万象の窓㉛森林太郎と脚気　……江見悦子 風音散歩㉓　……小林愛子 同人会だより　「万象」オンライン同人句会の参加者募集 ……沢辺たけし 続・風のしをり⑩子規の俳句鑑賞(六)　林徹　編集部
	巻頭　星野信子(横浜) 田村愛子さん 八月十九日逝去(九十五歳)	巻頭　渡辺志ま(燕)	巻頭　一由久美子(東京) 内藤恵子さん 十月三十一日逝去(八十九歳)

	vol.272 令和6年11月号	vol.273 令和6年12月号
万象俳句賞作品 「万象俳句賞」応募作品の一句　江見悦子主宰選	名誉主宰作品　虫の夜　内海良太 主宰作品　夕野分　江見悦子 同人特別作品　晩夏光　瀬谷和代 藍瓶　光岡れい子	名誉主宰作品　瓢の実　内海良太 主宰作品　かつぼれ　江見悦子 同人特別作品　馬鈴薯の花　大村かし子 生身魂　宮西修一
古典と遊ぼう⑯ 受領と娘たち―国風文化に一役― ……内海良太 第二十二回万象俳句賞発表 万象俳句賞　空の不思議　伊藤美音子 次点　茶摘　伊東文恵 佳作　辺土の桜　松田好子 佳作　鳥　杉澤修 選評　得点表　審査経過　……江見悦子ほか 江見悦子自選句鑑賞⑬ ……神田美穂子　増田幸子 中山純子忌に寄せて（没後十年）……江見悦子 ……内海良太　井村和子　中條睦子ほか 万象ノオト「カレンダー」 珈琲ぶれいく㊸	万象の窓㉜ 辞書と歳時記 ……江見悦子 風音散歩㉔ ……小林愛子 同人会だより　第七回「中山純子記念俳句賞」作品募集 ……沢辺たけし 続・風のしをり⑪ 子規の俳句鑑賞（七）林徹　編集部 万葉の抒情⑮「万葉集」にたずねる抒情の源流⑮ 橋本清 江見悦子自選句鑑賞⑭ ……亀田やす子　木内マヤ 佐野鼎句会に江見主宰をお迎えして（栃木）　芝宮留美子 第9回いわき海の俳句全国大会（報告）…成瀬真紀子 俳句カレンダー掲載句自註 ……高橋ひろ 万象ノオト「掃除」 珈琲ぶれいく㊹ 令和六年「万象」全国俳句大会作品集	万象の窓㉝ 季語について1 ……江見悦子 風音散歩㉕ ……小林愛子 同人会だより　第七回「中山純子記念俳句賞」作品募集 ……沢辺たけし 続・風のしをり⑫ 子規の俳句鑑賞（八）林徹　編集部
	巻頭　松永博子（静岡） 新同人発表 宮田千恵子　谷廣司　一由久美子 為永香月枝　星野信子	巻頭　松井宣夫（東京）

	vol.274 令和７年１月号	vol.275 令和７年２月号
	名誉主宰作品　初　筑　波　内海良太 主　宰　作　品　天　辺　の　鴛　江見悦子 新春特別作品　フォルティッシモ　伊藤美音子 同人特別作品　雪のサラブレッド　落合裕子 相良草競馬　望月敏男	名誉主宰作品　初　明　り　内海良太 主　宰　作　品　冬たんぽぽ　江見悦子 同人特別作品　寒を生く　荻野加澄子 北の大地　入山繁幸
万葉の抒情⑯「万葉集」にたずねる抒情の源流⑯　橋本　清 江見悦子自選句鑑賞⑮……内海良太　三屋英俊 万象ノオト「水筒」 珈琲ぶれいく㊺ 「万象」句会一覧 万象この一年……大木　茂	万象の窓㉞　季語について２……江見悦子 風音散歩㉖……小林愛子 同人会だより　令和７年を迎えて……曽根　満 令和６年度「万象」同人会総会・全国俳句大会報告 ……小池清晴 続・風のしをり⑬　子規の俳句鑑賞（九）　林　檎　編集部 万葉の抒情⑰「万葉集」にたずねる抒情の源流⑰　橋本　清 俳句カレンダー掲載句鑑賞　内海良太　…江見悦子 江見悦子句集「砂時計」鑑賞（「俳句界」より転載） ……柏原眠雨 「俳誌月評」（「鴻」より転載） 「俳誌周遊」（「扉」より転載） 万象ノオト「亀」 珈琲ぶれいく㊻	万象の窓㉟「切れ」について１……江見悦子 風音散歩㉗……小林愛子 同人会だより　同人名簿についてのお願い　大久保　進 続・風のしをり⑭　子規と私（一）　細見綾子　編集部 万葉の抒情⑱「万葉集」にたずねる抒情の源流⑱　橋本　清 句集鑑賞　倉谷紫龍句集「群青の湖」に寄せて ……江見悦子　中者正機　磴田勝子　中村　優 万象ノオト「図書館」 珈琲ぶれいく㊼
巻頭　松永博子（静岡） 令和６年度「万象」同人総会・全国大会 十月二十八日（月） 東京・ホテルグランドヒル市ヶ谷 参加者九十二名	河原昭子さん 一月六日逝去（八十二歳） 内海良太名誉主宰 一月二十六日逝去（八十六歳）	巻頭　松田好子（金沢）

vol.276
令和７年３月号

主宰作品　松過　江見悦子
同人特別作品　神楽坂　名和政代
渡良瀬遊水地　茂木弘子

万象の窓㊱「切れ」について２　……江見悦子
風音散歩㉘　……小林愛子
同人会だより　「万象」オンライン同人句会の参加者募集
……沢辺たけし
続・風のしをり⑮　子規と私（二）　細見綾子　編集部
万葉の抒情⑲「万葉集」にたずねる抒情の源流⑲　橋本　清
俳句カレンダー掲載句自註　……今越みち子
万象ノオト「テレビ」
珈琲ぶれいく㊽
４月号よりの模様替えについて（予告）…編集部

巻頭　松永博子（静岡）
出版　山口素基第六句集「吉野百景」
曽根　満同人会会長
三月一日日逝去（八十四歳）

vol.277
令和７年４月号

主宰作品　春みぞれ　江見悦子
名誉顧問作品　杖の道　小林愛子
同人特別作品　幼名　藤原千代子
初しぐれ　売野　緑
新同人競詠作品
谷　廣司　一由久美子
為永香月枝　星野信子

万象の窓㊲　さようなら良太先生　……江見悦子
風音散歩㉙　……小林愛子
同人会だより　句会に思う　……中條睦子
私のこの一句　……福島せいぎ　井村和子
谷渡末枝　山本とく江
続・風のしをり⑯　子規と私（三）　細見綾子　編集部
万葉の抒情⑳「万葉集」にたずねる抒情の源流⑳　橋本　清
俳句カレンダー掲載句自註　……中村千久
万象ノオト「踏切」
珈琲ぶれいく㊾
編集部から　夢で見た選句の話　……中村千久

巻頭　入河大河（松山）

vol.278
令和７年５月号

主宰作品　春の雲　江見悦子
名誉顧問作品　つちふる　小林愛子
内海良太の百句　編集部抄

万象の窓㊳　東京大空襲　……江見悦子
風音散歩㉚　……小林愛子
同人会だより　小さな吟行句会　……榎本文代
私のこの一句　……前田貴美子　榎本文代
松原智津子
内海良太名誉主宰を悼む　……江見悦子　小林愛子
中村千久　福島せいぎ　柳澤宗正　松原智津子
大木　茂　中條睦子　前田貴美子　沢辺たけし
内田郁代　中嶋久登　三屋英俊
続・風のしをり⑰　子規と私（四）　細見綾子　編集部

巻頭　奥澤よし江（市川）

	vol.279 令和7年6月号	vol.280 令和7年7月号
	主宰作品　さくら餅　江見悦子 名誉顧問作品　花の雲　小林愛子 同人特別作品　芹の水　佐藤和子 　　蛍狩　岡村純子 曽根　満　二十句　編集部抄	主宰作品　矢車菊　江見悦子 名誉顧問作品　黒揚羽　小林愛子
万葉の抒情㉑「万葉集」にたずねる抒情の源流㉑　橋本　清 薄荷飴日月譚　行く秋や良太と拾ふ小さき骨　中村千久 温故知新（「俳句界」（２０２５年４月号）より転載） ……江見悦子 万象ノオト「靴下」 珈琲ぶれいく㊿	万象の窓㊴　俳人協会総会に参加して　……江見悦子 風音散歩㉛　……小林愛子 同人会だより　会長就任ご挨拶　……中條睦子 私のこの一句　……中條睦子　渡真利真澄 　　疋田華子　三好かほる 第六回中山純子記念俳句賞発表　万象俳句会・万象同人会 正賞　白山に雪　伊藤美音子 正賞　極月の水　神田美穂子 準賞　白川郷　成瀬真紀子 佳作　おおばこの花　下嶽孝一 特別賞　初午　今越みち子 選評・順位表　応募者一覧 曽根　満氏を悼む　……神田美穂子　大村峰子 内藤恵子氏を偲ぶ　先生、会いに来ました…　南雲秀子 続・風のしをり⑱　子規と私（五）　細見綾子　編集部 万葉の抒情㉒「万葉集」にたずねる抒情の源流㉒　橋本　清 「万象」句会一覧 「万象」組織と業務分担（令和7年4月から） 万象ノオト「ランドセル」 珈琲ぶれいく㊶	万象の窓㊵　ばら二題　……江見悦子 風音散歩㉜　……小林愛子 同人会だより　富士市と葛飾北斎の富嶽三十六景 ……神田美穂子
巻頭　井端久子（珠洲）	巻頭　松井宣夫（武蔵村山）	
	出版　小林愛子第三句集「くれのおも」	

	vol.281 令和7年8月号	vol.282 令和7年9月号
	主宰作品　窓若葉　江見悦子	主宰作品　からすうりの花　江見悦子
	名誉顧問作品　定家葛　小林愛子	名誉顧問作品　夏の月　小林愛子
	同人特別作品　古き良き町　内田郁代	同人特別作品　三番瀬　久保村淑子
	新人賞受賞作品　草間三香子	石狩野　中鉢弘一
	火縄銃　江見悦子選	
私のこの一句 ……吉中愛子　亀田やす子 岡本敬子　神田美穂子	万象の窓㊶輪島の段駄羅 ……江見悦子	万象の窓㊷「しょうけい館」を訪ねて……江見悦子
続・風のしをり⑲子規と私（六）細見綾子　編集部	風音散歩㉝ ……小林愛子	風音散歩㉞ ……小林愛子
万葉の抒情㉓『万葉集』にたずねる抒情の源流㉓　橋本　清	同人会だより　幹事会報告 ……内田郁代	同人会だより　「風」の師欣一・綾子の句碑 ……前田貴美子
万象ノオト「コップ」	「中山純子記念俳句賞」の終了について …中條睦子	私のこの一句 ……藤原千代子　名和政代 増田幸子　山下良江
珈琲ぶれいく㉒	私のこの一句 ……内田郁代	続・風のしをり㉑子規と私（八）細見綾子　編集部
第十八回「万象」千葉県支部俳句大会　報告　漆木翠雲	大村峰子	万葉の抒情㉕『万葉集』にたずねる抒情の源流㉕　橋本　清
（編集部から）「ノマ点」をめぐって ……中村千久	第二十三回「万象」新人賞発表　松永博子	万象ノオト「消しゴム」
	大内佐奈枝	珈琲ぶれいく㉔
	選考経過　選考の感想 ……万象俳句会	
	続・風のしをり⑳子規と私（七）細見綾子 ……江見悦子ほか	
	万葉の抒情㉔『万葉集』にたずねる抒情の源流㉔ ……編集部	
	万象ノオト「電話」	
	珈琲ぶれいく㉓ ……橋本　清	
	薄荷飴日月譚　帯坂に山車押す脛の力瘤 …中村千久	
	巻頭　入河大河（松山）	巻頭　井端久子（金沢）
	保存版「『万象』誌における俳句作品の表記について」（編集部）を配付	

vol.283
令和７年10月号

主宰作品　広島忌　江見悦子
名誉顧問作品　花火　小林愛子
同人特別作品　新田の荘　大木茂
梅雨　桑原優美子
第二十三回万象俳句賞応募作品抄
江見悦子選
万象の窓㊸「省略」について１……江見悦子
風音散歩㉟……小林愛子
同人会だより「万象」オンライン同人句会の参加者募集
……小池清晴
第二十三回万象俳句賞発表
万象俳句賞　尾を高く　穂苅照子
次点　一日の春野　辺野喜宝来
佳作　京ことば　松永博子
選評　得点表　審査経過……大木茂　織田みさゑ
私のこの一句……佐藤哲　今越みち子
続・風のしをり㉒子規と私（九）細見綾子　編集部
万葉の抒情㉖「万葉集」にたずねる抒情の源流㉖　橋本清
万象ノオト「ジャム」
俳句カレンダー掲載句自註……江見悦子
珈琲ぶれいく㊺

巻頭　辺野喜宝来（那覇）

大湾宗弘氏
十月二十五日逝去（八十二歳）

vol.284
令和７年11月号

主宰作品　綾子の忌　江見悦子
名誉顧問作品　文月　小林愛子
同人特別作品　布施弁天　山本とく江
鳥屋野潟　高野松風
万象の窓㊹「省略」について２……江見悦子
風音散歩㊱……小林愛子
同人会だより　穏やかな出来秋を……林陽子
私のこの一句……林陽子　古川京子
落合裕子　福島吉美
続・風のしをり㉓子規と私（十）細見綾子　編集部
万葉の抒情㉗「万葉集」にたずねる抒情の源流㉗　橋本清
万象ノオト「薬」
珈琲ぶれいく㊻
令和七年「万象」全国俳句大会作品集

巻頭　奥澤よし江（市川）
新同人発表
松永博子　松井宣夫　松田好子
入河大河　奥澤よし江　井端久子
辺野喜宝来

vol.285
令和７年12月号

主宰作品　松の露　江見悦子
名誉顧問作品　無月　小林愛子
同人特別作品　しぐるる　喜多尾明子
登呂遺跡　本多ひとみ
万象の窓㊺「日々新たに生きる」……江見悦子
風音散歩㊲……小林愛子
同人会だより　俳縁……谷渡末枝
私のこの一句……大橋雅子　塩井志津
田中道江　広瀬俊雄

巻頭　鈴木隆久（佐倉）

	vol.286 令和8年1月号	vol.287 令和8年2月号
	主宰作品　初時雨　江見悦子 名誉顧問作品　草の花　小林愛子 新春特別作品　追伸　穂苅照子 同人特別作品　光陰　髙橋ひろ 菊胎　小池清晴	主宰作品　年惜しむ　江見悦子 名誉顧問作品　大綿　小林愛子 同人特別作品　石蕗の花　桔梗純 記紀の道　中山芳教
俳句鑑賞　小林愛子第三句集「くれのおも」　江見悦子 橋本　清　中村千久　福島せいぎ　中條睦子 榎本文代　前田貴美子　岡本敬子　山本とく江 髙橋ひろ　砂地宏子 続・風のしをり㉔子規の写生論の展開（一）　髙木良太　編集部 万葉の抒情㉘「万葉集」にたずねる抒情の源流㉘　橋本　清 万象ノオト「駅」 珈琲ぶれいく㊼ 句会一覧 万象この一年　……　大木　茂 薄荷飴日月譚　はればれと冬の噴水吹かれをり　中村千久	万象の窓㊻　晩秋の二日間　……　江見悦子 風音散歩㊳　……　小林愛子 同人会だより　創刊二十五周年を有意義な年に　中條睦子 私のこの一句　……　阿久津勝利　沢辺たけし 藤田裕子　奥　太雅 令和7年度「万象」同人会総会・全国俳句大会　報告 ……　小池清晴 「この本この一句「くれのおも」」（月刊「俳句界」より転載） 俳句カレンダー掲載句自註　……　江見悦子 続・風のしをり㉕子規の写生論の展開（二）　髙木良太　編集部 万葉の抒情㉙「万葉集」にたずねる抒情の源流㉙　橋本　清 万象ノオト「車」 珈琲ぶれいく㊽	万象の窓㊼　阿波徳島へ　……　江見悦子 風音散歩㊴　……　小林愛子 同人会だより　同人名簿についてのお願い　万象同人会 私のこの一句　……　加藤季代　髙橋ひろ 成瀬真紀子 続・風のしをり㉖子規の写生論の展開（三）　髙木良太　編集部 万葉の抒情㉚「万葉集」にたずねる抒情の源流㉚　橋本　清 宮﨑知恵美
	巻頭　髙野翠子（東京） 令和7年度「万象」同人総会・全国大会 十月二十七日（月） 東京・ホテルグランドヒル市ヶ谷 参加者八十三名 講演「俳句の三要素」 橋本　清氏（「万葉の抒情」執筆者） 出版 柳澤宗正米寿記念出版句集「遠富士」 下嶽孝一氏　一月十日逝去（八十三歳） 谷　廣司氏 一月二十七日逝去（七十六歳）	巻頭　村田由美子（柏）

	vol.288	vol.289	vol.290
	令和８年３月号	令和８年４月号	令和８年５月号
	主宰作品　御慶　江見悦子 名誉顧問作品　花びら餅　小林愛子 同人特別作品　冬晴の海　大橋雅子 大鳥居　中川雅月	主宰作品　春の雪　江見悦子 名誉顧問作品　雪　小林愛子 同人特別作品　梅の里　大内佐奈枝 虫送り　杉澤修 新同人競詠作品 松永博子　松田好子 入河大河　奥澤よし子　井端久子 辺野喜宝来	主宰作品　花びらの影　江見悦子 名誉顧問作品　浮雲　小林愛子 同人特別作品　蔵の街　上岡佳子 雪に暮らす　北浦蒔子
万象ノオト「コンビニ」 珈琲ぶれいく㊾ 「他誌管見」（俳誌「たかんな」十一月号より） 会員作品投句先変更　成瀬真紀子から林陽子へ（三月十五日締切より）	万象の窓㊽句集のすすめ……江見悦子 風音散歩㊵……小林愛子 同人会だより　「万象」オンライン同人句会の参加者募集……万象同人会 私のこの一句……山本右近　伊藤美音子　佐藤和子 続・風のしをり㉗子規の写生論の展開（四）　高木良太　編集部 万葉の抒情㉛「万葉集」にたずねる抒情の源流㉛　橋本　清 万象ノオト「リモコン」 珈琲ぶれいく	万象の窓㊾この冬の雪……江見悦子 風音散歩㊶……小林愛子 同人会だより　俳句と共に五十年……山本とく江 私のこの一句……高田たみ子　新妻奎子 穂苅照子　荻野加尋子 続・風のしをり㉘子規の写生論の展開（五）　高木良太　編集部 万葉の抒情㉜「万葉集」にたずねる抒情の源流㉜　橋本　清 万象ノオト「血圧」 珈琲ぶれいく㉑ 薄荷飴日月譚　花冷えや木乃伊横たふ硝子箱　中村千久	万象の窓㊿ドナルド・キーンさんと日記文学　江見悦子 風音散歩㊷……小林愛子 同人会だより　私と俳句……中鉢弘一 私のこの一句……柳澤宗正　大内和蕙　大村かし子
	巻頭　菅原雅子（金沢）	巻頭　渡辺志ま（燕）	巻頭　高山ひさ子（那珂川）
		多田英治氏　四月十二日逝去（九十歳）	

	vol.291 令和8年6月号	vol.292 令和8年7月号
	主宰作品　紫木蓮　江見悦子 名誉顕問作品　春の雷　小林愛子 同人特別作品　宮沢賢治と行く　大内マキ子 阿波の春　平岡功	主宰作品　鳥の歌　江見悦子 名誉顕問作品　春の虹　小林愛子 同人特別作品　喜望峰　広瀬俊雄 桜の頃　木内マヤ
句集鑑賞　柳澤宗正『遠富士』…江見悦子　小林愛子 中村千久　福島せいぎ　中條睦子 吉中愛子　椹本文代　大久保進 続・風のしをり㉙子規の写生論の展開(六)　高木良太　編集部 万葉の抒情㉝「万葉集」にたずねる抒情の源流㉝　橋本清 万象ノオト「旅」 珈琲ぶれいく㉒	万象の窓㊶寛永寺の双龍……江見悦子 風音散歩㊸……小林愛子 同人会だより　斎藤恒子さんの思い出…久留島規子 私のこの一句……久保村淑子　島野ひさ 三屋英俊　桔梗純 俳句カレンダー掲載句自註……中條睦子 続・風のしをり㉚子規の写生論の展開(七)　高木良太　編集部 万葉の抒情㉞「万葉集」にたずねる抒情の源流㉞　橋本清 万象ノオト「自転車」 珈琲ぶれいく㉓ 「万象」句会	万象の窓㊷「梅椹」創刊二十五周年祝賀会に参加して ……江見悦子 風音散歩㊹……小林愛子 同人会だより　春の闘病記……中本清 私のこの一句……紅露恵子　大内マキ子 小川明美　豊田高子 俳句カレンダー掲載句自註……中村千久 続・風のしをり㉛沢木欣一の指標と俤念(一)　中山純子　編集部 万葉の抒情㉟「万葉集」にたずねる抒情の源流㉟　橋本清 「この本この一句「遠富士」(月刊「俳句界」より転載) 万象ノオト「トマトケチャップ」 珈琲ぶれいく㉔ 薄荷飴日月譚　プリズムに少年の日の夏の色　中村千久 「万象」組織と業務分担（令和8年7月から）
巻頭　髙山ひさ子（那珂川）		巻頭　髙山ひさ子（那珂川）

vol.293
令和８年８月号

主宰作品　叉の詩　江見悦子
名誉顧問作品　黒鞄　小林愛子
同人特別作品　鴨の子　紅露恵子
金婚旅行　中村優

万象の窓53　元気になる話……江見悦子
風音散歩45……小林愛子
同人会だより　幹事会報告……内田郁代
私のこの一句　倉谷ますみ美　宮城誠
藤本節子
続風のしをり32沢木欣一の指標と信念(二)　中山純子　編集部
万葉の抒情36「万葉集」にたずねる抒情の源流36　橋本清
万象ノオト「川」
珈琲ぶれいく75
薄荷飴日月譚　絵日記に収まりきらぬ夏祭　中村千久

巻頭　田上幸子（小松島）

巻頭　宜野顕（宜野湾）

新妻奎子さん
八月九日逝去（八十三歳）

vol.294
令和８年９月号

主宰作品　ミントの香　江見悦子
名誉顧問作品　洗濯機　小林愛子
同人特別作品　はつなつ　伊藤美音子
万緑　岡田ゆみ子

万象の窓54　一枚の写真……江見悦子
風音散歩46……小林愛子
同人会だより　俳句スクール……桔梗純
私のこの一句……大長文明　阿部澄
加賀葉子
続風のしをり33沢木欣一の指標と信念(三)　中山純子　編集部
万葉の抒情37「万葉集」にたずねる抒情の源流37　橋本清
万象ノオト「坂」
珈琲ぶれいく76

新中央句会からのお知らせ

▽10月例会は全国俳句大会の直前に当たり、休会とします。

▽11月22日（日）大妻女子大学　H棟313室
13時より

謹告

新妻奎子（にいづまけいこ）氏（同人・川崎）は病気ご療養中のところ令和８年８月９日逝去されました。
享年83歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます

万象俳句会

消息等

江見悦子主宰・小林愛子名誉顧問の句

「くぢら」8月号に

薄暑光カタルーニャ語の「鳥の歌」　悦子
行く春の葉裏を返す風の音　愛子

「伊吹嶺」7月号に

水底に花びらの影落ちゆけり　悦子
浮雲のをちこち地虫穴を出づ　愛子

「なると」7月号より

福島せいぎ顧問新しき句碑建立誠におめでとうございます。狸の燭台より抜粋してご紹介します。

「次々と句碑を建てて喜ぶ阿呆」の一人が又句碑を建てた。句碑開きの日は六月六日梅雨の晴れの一日を賜った。雨男の私には珍しいことで、皆さんから「先生の日ごろのご精進のおかげ」とおだてられた。私は生臭坊主なので「いやいや皆さんのおかげ」と真心から思った。今回の句碑にはこだわった。句も初案は〈この月のどこかにいくさはじまりし〉であったが、この句は既に境内の狸の彫刻の台座に刻まれているので止めた。二案は〈まんばう来る春の岬を見に行かな〉であった。好きなマンボウの句だが、万福寺は平安時代智證大師によって開かれた古刹である。歴代の住職に対しても生臭の句は失礼にあたる。結局〈たましひの遊ぶ八月十五日〉に決めた。八月十五日は、終戦記念日であり、旧暦の盆の日でもある。「たましひ」は大戦でなくなった多くの人たちやわが国を支えてきたご先祖の魂への思いも込めている。

金沢支部より（中山純子忌水鏡句会）

先生の命日を控えた、7月27日（木）金沢市の近江町いちば館に於いて、先生の句集『水鏡』から名付けた水鏡句会が開催された。当日は七句持ち寄りで、十六名が集まり和気あいあいの句会となった。

純子忌や緑深むる夏木立　成瀬真紀子
ひもすがら風鈴のなり師を偲ぶ　石川純子
野の花を涼しく活けて純子の忌　伊藤美音子
河童忌や足音吸ひ込む水鏡　豊田高子
純子忌や桃の初もの口にして　谷渡末枝

中條睦子（報）

2020年夏「花野」創刊準備号から

川上良子主宰の、二句一章について、また季語について興味深い文章が掲載されています。ぜひ参考にして下さい。

☆響き合う言葉☆

甲斐駒や定位置に吊る蠅叩

俳句にはこの句の甲斐駒と蠅叩のように、直接関係のないものが組み合わさって詠まれている句がある。二句一章の句という。

今ではあまり見かけなくなった蠅叩であるが、時々行く山荘には、甲斐駒ケ岳が見える大きな窓の脇に蠅叩が吊るされている。何年も視界の中にこの景はあった。

この蠅叩も季語だなあ、と思った時に自然と一句になったと思う。甲斐駒と定位置につるす蠅叩、微妙に響き合ったのであろう。句会に出すと思いがけず多くの方が共鳴して下さった。改めて自分の句を見直す結果になった句でもある。

ここで私が言いたいことは、季語とその他の表現が響き合うことが俳句の一つの要素あるということ。響き合う感覚は理屈ではない。私の場合、俳句を詠み続けるなかで培われたように思う。

（報・編集部）

（←この線より切り取ってください）

万象作品

令和九年　二月号

（十一月十五日締切）

都または市・町・村名	ふりがな
姓　号	
	年齢

（句の表記は歴史的かなづかいで）（＊の枠内には何も書かないでください）

＊

＊

＊

＊

＊

110円切手を貼ってください

0640808

札幌市中央区
南八条西15-1-5-904

万象作品投句係 行

氏名	住所

〈通信欄〉

編集後記

▽インターネット動画の界隈で、日本語はおもしろい！　というのでバズっているのだとか。日本語を欠片ほども知らぬ人々は、「カタカタカッタカラカタタタキカッタ」という音が、日本人には意味を持って伝わることに驚きもし、呆れもしているという。

私たち日本語ネイティブは、これを「肩堅かったから肩叩き買った」と、造作なく理解している。こんな愉快な言語を、世界一短い短詩で楽しめるとはなんと幸せなことか。（千久）

▽編集長の陣頭指揮の下、「万象」の大きな節目となる、25周年記念事業の一つ、10月号の発行に関わる事が出来たことは、感慨深いものです。後は、月末の全国俳句大会に向けて、怠りなく準備を進めて参ります。皆様のご協力をお願い申し上げます。（規子）

▽この夏は不注意から左手首を骨折してしまい金属で固定する手術を受けました。入院中のバイタル入力・内服・点滴の確認などすべて手首の識別用リストバンドのバーコードの読み込みから進められ手際よさに驚きました。転倒に気を付け、リハビリを優先して過ごそうと考えています。（久美子）

▽「東西南北」担当の宮崎さんの代理を今月から引き受ける事になりました。校正は近所に住む兄にやってもらいました。普段「くだらねぇ事やってんな～」と無理解な兄でしたが、サラリーマン時代の文書能力が甦ったのか、赤ペンを山ほど入れ、「また持ってこい、みてやるから」と満更でもない様子でした。草の根活動ですね。（宣夫）

▽「墓洗ふ」という季語で、

墓洗ふゆつくり逝くとさりげなく

と詠んだ。同じ境遇の俳友が、

夫の背を摩るがごとく墓洗ふ

と詠んだ。どちらが供養になるか、寡婦の本音を表しているか面白い。洗われている本人は微笑している。（みや子）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分　一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座　00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284－0015　四街道市千代田1－7－10

塗木翠雲

万象　十月号

第二十五巻　第七号

通巻　第二九五号

令和八年十月一日　発行

主宰　江見悦子

発行人　江見悦子

編集人　中村千久

〒168－0072

東京都杉並区高井戸東一－三一－六－603

万象発行所

☎〇三－六三二四－五七九六

印刷・株式会社ダイワクリエイト（☎ 03-3267-2125）

■「万象」創刊25周年記念■　令和8年度

「万象」全国俳句大会
「万象」同人会総会　案内

開催日　令和8年10月29日（木）

午前11時（午前10時30分より受付開始）～　午後4時終了予定

会場　ホテルグランドヒル市ヶ谷（東京都新宿区市谷本村町4－1）☎03－3268－0117

【交通】ＪＲ中央線・総武線、都営地下鉄新宿線、東京メトロ有楽町線「市ヶ谷駅」より徒歩3分

同人会総会
25周年祝賀会　午前11時～　活動報告・他
正午～　祝宴

講演　坪内稔典氏

全国俳句大会　午後2時25分～　表彰　万象俳句賞
披露　令和8年度新同人
大会入選作品（特選句には選者染筆贈呈）

※当日・前日の当ホテルでの宿泊の斡旋はいたしませんので、各自ご手配ください。
※有志吟行会は実施いたしません。大会終了後、別室にて懇親会（希望者による二次会）を予定しています。
※申込を済まされた方が、当日出席できなくなった場合は、会計・小池（03－3681－5900）までご連絡ください。

全国の同人・会員のみなさまにお目にかかれるのを楽しみにしております。

令和8年度「万象」全国俳句大会実行委員会　大会委員長　江見悦子
令和8年度「万象」同人会総会　実行委員長　中村千久
実行委員長　中條睦子